**№30　テーマ『人間として本物とは何か』**

**講話日2005年11月21日**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：だいぶ寒くなってきましたね。外でお仕事をされる方、本当に大変だと思います。まあ、今日のテーマは、「人間として本物とは何か」というテーマです。これはこれからアメリカに代わって日本人がですね、世界の指導者となって、いろんなこの領域でリーダーとしての役割をしなければならない。また、この仕事のうえでもですね、この世界の同業者の目標となるような、そういうこの立場に立って活躍しなければならない時代を迎えます。まあ、そういう意味からするならばですね、仕事の能力に応じてもですね、世界の頂点に立つような、まあ、そういう世界の目標となるような能力をつくっていかなければならないんですけども、まあ、それにも増して、人間としてこの尊敬される、信頼されるというふうな、そういうこの人格、人間性というものをわれわれはこれから目指していかなければならない。世界から非難されて、ばかにされて、軽く見られるような、そういうこの状況ではいけませんので、やはりこの能力も人間性も共にこの世界の目標となることができるような、そういう内容を持つ努力をしていく必要があります。**

**まあ、そういう意味においてですね、もう一度、われわれは、この人間として本物とはなんなのか。世界人類の目標となるような、まあ、そういうこのあり方というものをですね、われわれはこれから自らのものにしていくという努力をすることが、仕事のうえで同業他社と差別化というね、そういうこのものをつくっていって、会社が発展、成長していく力をつくるためにも、やっぱり社員の方々、皆さん方全体が、アサヒグローバルの社員の方々をみんなこう、人間性によって素晴らしいという信頼を得て、仕事を拡大していくというふうなですね、まあ、そういうふうな状況も考えて、努力しないといけないと思います。まあ、そういう観点から、この人間として本物とはなんなのか。これは非常にやはり重要なテーマで、まあ、しかもこの人間関係を考えてもですね、夫婦のあいだがなんとなく友達っちゅうよりは、もっともっとこう、お互いに尊敬し合いながら、尊重し合いながら、お互いを大事にし合いながら付き合えるようなですね、まあ、そういうかたちの夫婦関係もこれから考えていかなければならないので、あまり友達、友達という、友達夫婦だと、なんとなくお互いにこう気軽過ぎてですね、ついついわがままが出てきてしまって、うまくいかなくなるような例もありますので、まあ、そういう意味でも、やっぱり夫婦の関係においても、お互いに尊敬し合えるというふうな、まあ、そういうふうな心情というものが大事なものじゃないかなというふうに思います。**

**まあ、その意味で、今日はこの本物論というですね、この人間として本物とはいったいなんだろう。まあ、そういう問題について考えていきたいと思うんですけど、だけど、一般的にはですね、個性の時代といって、いろんなこの考え方なり、価値観なり、人間のあり方が認められて、許されなければならないという、まあ、そういうこの時代ですので、本物とか、偽物とかというような区別は、べつに人間にはいらないんじゃないかと。まあ、どうだってええじゃんって、そういう感じのですね、人間観というものもないわけではありません。だけども、にもかかわらずですね、やっぱりわれわれは、この人間において本物、偽物という区別を意識しながらですね、本物になるように、まあ、そういう努力をする必要があるということが、人間の生き方において言えますので、まずは、なぜそういうこの本物、偽物という区別をしなければならないのか。また、なぜ本物、偽物という意識を持って、本物を目指して生きるというですね、生き方がなぜ大事なのか。その理由、根拠からですね、お話をしていきたいと思います。**

**で、まあ、学問的に言ってですね、この人間に本物があるというふうに、この考えなければならないという根拠が３つあるんですよね。で、その第１番目が、このかたちは内容の表現であるという、この原理からくる理由なんですけども、これはどういうことなのかと申しますと、人間という命のかたちというものは、確実にですね、他の動植物とは違う、独特の命のかたちを持っております。いわゆる、われわれは、犬猫ではないと。人間だと。そういうこの人間というものを特徴付ける命のかたちというものが存在します。で、そのかたちというものが、何故にそういうかたちになったのかという理由が必ずあるわけなんですよね。で、しかもこの命のかたちというのは、全人類に共通する命のかたちである。**

**じゃあ、かたちとはいったいなんなのかということなんですけど、そのかたちというものはですね、そのかたちの中に込められておる、この能力とか、機能とか、性質とか、本質とか、まあ、そういうふうなものがですね、それは目に見えないもんなんですけども、そういうこのかたちの中にある機能とか、性質とか、性格とか、本質とか、そういうふうなものがですね、この表現される、かたちになって現れ出たものが、このかたちというものを決定するんだというふうにですね、言うことができます。これは、まあ、機械なんかでもですね、その機械に新しい機能が付け加われば、確実にまたその機械のかたちが変わってきます。そういう意味で、機械というのは完全にその機械が持っておる機能のですね、顕現、機能の表現としてかたちが決まるというふうに言って過言ではありません。その意味では、かたちは常に内容を表すものであって、内容が変われば、かたちが変わってきます。かたちが同じだっちゅうことは、同じ内容を持っていなければならない。まあ、そういうこの相関関係というものがですね、かたちと内容とのあいだにはあるんですよね。**

**で、そういうことからするとですね、必然的に人間、人類というものは、みんな共通の命のかたちを持っておって、そして、この人類の命のかたちというものは、他の動植物ともまったく違う、まあ、そういうかたちを持っておる。であるが故に、このかたちにふさわしい内容というものが当然、考えられなければならない。そして、このかたちにふさわしい内容を持っていなければ偽物、このかたちにふさわしい内容を持っておったら本物というですね、まあ、そういう区別をすることができるわけであります。だけども、この命のかたちというものはですね、われわれ人間が自分でつくったものではない。これは明らかにこの母なる宇宙の摂理の力によってですね、つくり出された命のかたちであって、その命のかたちを与えられて、われわれはこの、おぎゃあと生まれて、人間として生きていくというですね、まあ、そういうこのあり方をしておるわけであります。**

**ということは、この命のかたちというものはいったいなんなのか。それは、この命のかたちをつくった母なる宇宙の思いがですね、この命のかたちに込められておるというふうに、われわれは考えなければならない。すなわち、この命のかたちというものは人間がつくったもんじゃない。人智を超えたですね、人間の力を超えたはるかに大いなる力によって、この命のかたちはつくり出されて、そして、われわれに与えられたもんだ。だから、この命のかたちには、その大いなるものの思いが込められておって、その大いなるものの思い、すなわち、この命のかたちをつくった母なる宇宙の、この摂理の力、母なる宇宙の思いがですね、この命のかたちには込められておる。その母なる宇宙の思いをこのかたちにしたとき、こういうこの命のかたちが生まれてくるんだというふうにですね、理解しなければならない。すなわち、この人間という命のかたちにはですね、この命のかたちをつくった母なる宇宙の思いと、願いと、祈りがこもっておる。であるが故に、人間が人間らしく生きるということは、この自分の命に込められた母なる宇宙の思いを生きることであり、また人間らしく生きるということは、この命に、自分の命に込められた、母なる宇宙の願いと祈りに応える生き方をする。そこにですね、人間らしく生きるという生き方のこの基本的な道筋があるんだ。まあ、そういうふうにですね、この命のかたちというものをわれわれは意識しながら考えなければなりません。**

**人間が人間らしく生きるためには、自分の命に込められた母なる宇宙の思いとはなんたるもんなのか。どういう思いを母なる宇宙は自分のこの命に込めたのか。それを知ろうとして、その母なる宇宙の思いを自覚しながら生きる。そこにこの本物の人間、人間らしく生きるというね、そういう生き方が生まれてくるわけであります。で、人間というのは、ただ人間として固まったかたちを持っておるというよりはですね、人間はその命のかたちがだんだん成長していく。また、意識においても成長していく。成長というふうな、そういうこの変化をするような生き方をしますので、その変化というものがいったいなんなのかといったらですね、その変化の中には、この母なる宇宙の願いと祈りというものがこもっておってですね、その母なる宇宙の願いに応えようとして生きる。そこに自分の成長という姿がある。まあ、そういうふうにですね、われわれは理解する必要があります。**

**とにかく、基本的に何故にわれわれは、本物、偽物というものを意識しながら、本物を目指して生きるというですね、まあ、そういうこの生き方をセントバーナードであるかですね、まあ、そのことをこの考えないといかん。で、その何故にそういうこの本物としての生き方を目指すというですね、そういうこの生き方をする必要がある、その第１番目の根拠はね、かたちは内容の表現である。しかも、そのかたちをつくったのは自分ではない。母なる宇宙の摂理の力だ。だから、この命のかたちには、母なる宇宙の思いと、願いと、祈りが内容として込められておる。その母なる宇宙の思いと、願いと、祈りをかたちにしたとき、この人間という命のかたちになるんだというふうにね、われわれは考える必要があります。まあ、そういうところから、人間らしく生きるということは、この命に込められた母なる宇宙の思いと、願いと、祈りがなんたるもんなのかということを自分が知ろうとして、その母なる宇宙の思いに応える。また、その母なる宇宙の願いと祈りを実現しようとする、その意志を持ってですね、この生きる。そこに人間が人間らしく生きるという、人間の生き方の本筋、本道というものが存在するんだというふうに考えなければなりません。**

**これがまず、本物、偽物という区別を考えなければならない、また人間には本物、偽物があるんだというですね、まあ、そういうことが言える、第１番目の根拠であります。人間でありながら、母なる宇宙の思いをこの知ろうとする努力をしない。また、その思いに応える生き方をしない。これは偽物だというふうにですね、言わなければなりません。これは、まあ、将来、皆さん方が、もちろんもう結婚されて、お子さんもいらっしゃる方も随分いらっしゃると思いますけど、まあ、これから結婚される方も、とにかくはですね、子どもがもし、なんで本物、偽物なんてなことを考えないかんのやとこう、反発してきたときにですね、こうこうこうだと言ってですね、ちゃんと説明してあげて、わからせてあげられるお父さん、お母さんになってもらいたいと。で、そういうこの思いを持って、子どもが生きてくれるならば、必然的に立派なこの人間になることができますので、まあ、そういうこの自覚を持ってですね、生きる、そういうこの人間に子どもを成長させてあげてもらいたい。まあ、そういうこの意味も込めてですね、これは非常に大事な人生の生きる課題というものを知る、そういうこの原理であります。自分の命には、この命のかたちをつくった母なる宇宙の思いが込められておる。その母なる宇宙の思いを生きることが、人間らしく生きるという生き方の基本である。そのことをですね、まず押さえてもらいたい。それから、２番目のこの理由ですね。なんで人間に本物、偽物という区別を設けないかんのか。第２番目の理由は、人間は人間の皮を着たけだものにもなる。すなわち、人間は人間の子どもに生まれてきてもですね、人間になれるかどうかはわからないんですね。人間は人間の子どもに生まれてきても、この小さいころ、オオカミにさらわれちゃったりなんかしちゃったりなんかして、そのオオカミのお母さんのおっぱいを飲んで、オオカミの社会の中で成長していってしまうとですね、『狼少年ケン』になってしまったりなんかして、人間にはなれないというね、そういうこのことが、これまでの歴史の中でですね、証明されております。その代表的なものは、1920年にインドでですね、オオカミ少女が２人発見された。これはイギリスの牧師さんによって発見されたんですけども、その女の子たちは、約３カ月のころ、オオカミにさらわれて、で、６歳ぐらいで発見されたというふうに、まあ、言われております。で、まあ、３カ月のころから６歳ぐらいまで、オオカミの社会の中でですね、オオカミのお母さんのおっぱいを飲んで成長していくということになってくると、人間の子どもに生まれてきても、脳がですね、オオカミの習性を覚えてしまうんですね。そうすると、いわゆる三つ子の魂百までというふうに言われるように、６歳までオオカミと一緒に生活して、脳がオオカミの習性を覚えてしまうと、もう人間には戻らないんですよ。もうオオカミとして、その習性を持って生きていく以外にですね、変わりようがないというですね、まあ、そういう状態になってしまいます。**

**で、これはいったいどういうことなのかということなんですけども、この人間以外のですね、犬や猫は、人間に育てられてもですね、「人間少年ワン」になったり、「人間少年ニャン」になっちゃったりなんかしませんけどね。ということは、犬や猫は人間に育てられても、ワンと鳴くしかないし、猫はニャンと鳴くしかないんですよね。だけど、人間はこのオオカミに育てられてしまうとですね、人間というこのあり方を忘れてしまってですね、そして、オオカミの習性を持ってしまって、オオカミになってしまう。いわゆる、自分の意志を伝えるときには、人間の言葉をしゃべれないのでですね、オオカミ語っちゅうか、オーオーオーオーオーなんてなことになってしまったりなんかして、そういうふうな泣き声でですね、自分の意志を表現するようなことになってしまう。実際問題、インドで発見されたオオカミ少女は、なんとか人間に戻そうとする努力をされたんですよね。で、その努力というか、その訓練が厳しかったので、片方の子はすぐ死んでしまいまして、ストレスですぐ死んでしまって、もう１人の子は10年間ぐらい生きておったんですけど、やっぱりストレスがですね、オオカミを人間に戻そうとする、そのストレスが原因で、10年ぐらい生きておったんですけど、16～17歳で死んでしまったというふうに、まあ、言われております。で、結局、人間には戻らなかったんですよね。**

**だから、もううっかり、猫にさらわれちゃったりなんかすると、「猫少年ニャン」になっちゃったりなんかしてですね、人間の子どもに生まれてきても、ニャオーってこう鳴くかもしらんというですね、まあ、そういうふうなこの恐れもあるわけなんですよね。で、なんでいったい、この犬や猫はですね、人間に育てられても、「人間少年ワン」や「ニャン」にならないのか。なんで人間はオオカミに育てられると、『狼少年ケン』になっちゃうのかというね、この違いがどこにあるのかっちゅうことなんですけど、この人間以外の動植物はですね、遺伝子と本能の支配のもとでしか生きられないという、そういうこの段階の命なんですけど、人間という命はですね、遺伝子とか本能に一方的に支配されてはいない。もちろん、遺伝子や本能に支配されてる部分もあるんですけども、だけど、人間の命というものは、遺伝子と本能の支配に一方的に支配されていない。自由という領域を獲得した命なんですね。それがためにですね、生まれてから後に何を教えられるか。どう育てられるかによって、いかようにでも変容し得るというですね、そういう可変性というものを与えられた、まあ、そういうこの命が人間という命であります。**

**であるが故に、この生まれてから後のですね、この育てられ方、何を教えられるか、いかに育てられるか。その教えられた知識の内容や、育てられ方によってですね、人間はいかようにも変化するという、まあ、そういうこの可変性、可能性というものをですね、与えられた、自由という領域を50％持っておる。まあ、そういうこの命がですね、人間という命のこのあり方であります。であるが故に、上手に育てられれば、いかようにでも素晴らしい人間にもなる。だけども、下手な育てられ方をすればですね、いわゆる人の皮を着たけだものというね、まあ、そういうこのことにもなり得るというのがですね、人間という命が持っておる恐ろしさでもあり、また素晴らしさであるというふうにですね、言うことができるわけです。まあ、その意味でですね、この何を教えられるか、いかに育てられるかによって、この人の皮を着たけだものにもなればですね、素晴らしい内容を持った人間にもなれるという、まあ、そういうことを考えるならばね、当然そこからですね、じゃあ、この人間として素晴らしいという、そういうこのあり方になるためには、どういう内容を与えればよいのかというね、まあ、そういうことが当然、考えられなければならない。だから、まあ、人間においては、特に教育が大事なんだとこう、言われるわけであります。**

**何を教えるかによって、確実にその後は決まってしまうというですね、まあ、そういうふうなのが人間の命ですので、その意味で、特に人間においては教育が大事だ。そういうところからですね、この人間らしい人間にするためには何を教えなければならないのか、いかに育てられなければならないのかっちゅうことが問題になってきますので、そういうところからもですね、人間というのは、子どもを育てる場合にも、また自分が生きるためにもですね、この人間らしい人間とはなんなのか、人間としての本物性とはなんなのか。そのことをちゃんと知って、そうなるように育てる。そうなるように生きるということがですね、必然的に人間には要求されてくるわけであります。だから、本物、偽物というね、区別をちゃんと意識しながらですね、人間は生きなければならないということが、そこから言えてくるわけですね。**

**だけど、今のですね、世界の教育の現状というものを見てみますと、まだ世界のどの学校もですね、人間の格とはなんなのかということを誰も知りません。いわゆる人間性とはなんなのか、人間の格とはなんなのか。犬猫とは違う人間の格とはなんなのかということを学校は知らないで、子どもたちを教えております。まあ、それはこの近代社会というのはですね、人間の本質は理性と考えてましたので、理性さえ成長させたならば、人間は人間らしくなるんだとこう思ってですね、理性教育、知育偏重の理性教育をしてきました。だから、現在、世界で行われてる教育は理性教育であって、人間教育ではありません。人間をつくる教育をしておるんじゃなくって、理性を育てる教育というものをですね、学校ではやっておるだけです。だから、まだ学校で教えておる先生もね、人格とはなんですかと言われても、誰も答えられません。人間の格とはいったいなんなんですかと言われても、それに対しては答えられません。だから、人間性とはなんなのかっちゅうことについても、先生は知りません。しかも、大学の教育学部のですね、先生すら、それを知らない。大学の教育学部の教育の指導の仕方というのはですね、結局、人間の本質は理性と考えて、理性を成長させればですね、すべて解決するんだという、まあ、そういうこの考え方で教育が行われてますので、理性を成長させる、理性をこの磨くための教育は教えますけども、だけど、人間をつくるための教育は、まだ大学でも教えておりません。**

**実際問題、大学に行かれてもですね、人間教育は誰もしてませんし、誰も受けた経験がない。まだ人類の教育の現状はですね、そういう段階です。教育の目的が人間らしい人間をつくるということにあるということは、一応、わかっておってもですね、今の教育の水準というのは、理性を成長させるための教育というものがですね、考えられておるだけであって、人間性や人間の格をつくるというふうな、そういう教育はまったくこの教科の中に存在しません。教科書としてあるのは、すべて理性を育てるための知識教育か、あるいは技術教育、能力をつくるための技術教育かどちらかがですね、主体であって、学校でもその理性教育以外の体育とか、図画工作とか、音楽とか、そういう時間はあるんですけども、だけど、学生にとっては、それは一種、ほっとする遊びの時間です。自分を鍛えようとする時間ではありません。まあ、そういう意味においてですね、まだまだ人類のこの人間に対する理解の仕方というのは、非常に浅いというかですね、ほとんどまだ自分に目覚めていないというふうな、まあ、そういうこの状態なんですよね。まあ、このことも今、教育改革が全人類的な規模で叫ばれておる、考えられておるということのですね、やはり理由としてわかっていなければならない大事なことであります。**

**まだ全世界どこでも、人間教育はされていない。学校でされてることは、すべて理性教育である。理性を成長させる教育だけである。例えば人間性の教育がなされておるというところがあったとしても、それは人間教育じゃなくて、宗教教育なんですよ。仏教系の大学、仏教系の学校があったりですね、あるいは、キリスト教系の大学があったり、天理教系の学校があったり、神道系の学校があったり、そういうことはしますけど、そこで行われてることは人間教育じゃなくって、宗教教育です。まあ、そういうことを考えるとね、まだ人類は、この人間とはなんなのかを知らない。すなわち、まだ人間に目覚めていないというね、そういうこの段階なんだということをですね、われわれは自覚しながら、これからの時代というものを考えていかなければなりませんし、どういう教育をつくるか、どういうふうに教育するかっちゅうことは、そういうところから考えていかないといけないという課題であります。**

**これは脳生理学の観点から言うとですね、どういうことになってるかというと、人類にはですね、生まれながらに与えられた遺伝子というものが存在します。で、遺伝子というのは、これはいわゆる潜在能力なんですよね。まあ、潜在能力というのはどこにあるかというと、これも、もう前々から何回もこれはお話をしてることですから、もう耳にたこができるほど覚えてらっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんけど、中には全然、入ってなくって、忘れちゃってる人もおると思いますので、もういっぺん申しますけど、潜在能力というのは、この染色体の中に潜在してるんですね。で、染色体の中に存在する遺伝子が潜在能力そのものであります。これは生まれながらに全人類共通のものとして、みんな、与えられてるわけですね。みんな遺伝子を持って生まれてくる。すなわち、潜在能力が与えられて生まれてくる。で、この潜在能力というものはいったいなんなのかというと、これがですね、人間という命をつくった母なる宇宙が何を人間に期待しておるのか。それが潜在能力ということであります。だけど、まだ人間という命をつくった母なる宇宙が、人間という命に込めたですね、この思いと願いと祈りというものを表現する、この潜在能力というものの、まだ１割強しか人間は実現していない。これが脳生理学の今の理解の仕方です。**

**アインシュタインレベルで考えてもですね、まだ潜在能力の約３割弱しか使っていないというふうに、まあ、いわれております。いわゆる３割に満たない。普通の人間の場合には、命に与えられてる、生まれながらに持って生まれてきた能力の約１割強しかですね、まだ使って生きていないんだというふうに言われておるわけであります。ということは、その潜在能力のレベルから考えたら、人類の年齢は今、ちょうど12～13歳という感じなんですね。いわゆる人類の年齢は100歳と考えればね、人類はまだ100歳の中の12～13歳にようやくたどり着いたかなというふうな、まあ、そういうこの段階に今、あるんだというふうにですね、言わなければなりません。ということは、12～13歳というのは、なんなのかといったら、これからようやく自我に目覚めようかというね、そういうこの段階に今、あるんだということです。だから、現在の人類の学校教育はですね、人間教育がされていない。人間とはなんなのかを知らない。まだ人間が人間に目覚めていない。人類はまだ人間に目覚めていない。自我の目覚めの、今、入り口のところにきたかなという感じの、そういう年代なんだっちゅうことですよ。**

**これから人類は自我に目覚めて、この人間とはなんなのか。犬猫とは違う人間の格とはなんなのか。そのことをね、ようやくこの知ることができるという段階にこれから歴史的に入ろうとしておるというふうなですね、そういう理解の仕方が脳生理学という観点からはできます。まあ、実際にこの人類のこれまでの歴史を考えればですね、人類は、この母なる宇宙によって、人間として生んでいただきながらですね、古代においては、人類は人間でありながら、強大なる力に憧れてきた。また中世の時代においては、神や仏に憧れてきた。また近代においては、理性に憧れてきた。理性的なることを目標にしてきた。すわなち人類は人間として生んでいただきながら、まだ本当に人間なろうとしたことは一度もなかったんですね。母なる宇宙によって、人間として生んでいただきながら、これまで人類は、なんでお母さん、人間なんかに生んでくれたんやと。俺はもっと強大なる力を持った存在になりたかった。あるいは、神仏のような存在になりたかった。あるいは、理性のような完全なですね、まあ、そういう存在になりたかった。なんでお母さん、人間なんかに生んでくれたんだっちゅうて、その生んでくれたお母さんに文句を言いながら、不平不満を言いながら、生きてきたような歴史だった。**

**だけど、今、ようやくですね、人類は人間でありながら、他の者に憧れることの愚かさに気付いてですね、ようやく今、これから人類は、よくぞお母さん、人間に生んでくれました。われわれはこれから、人間に生んでいただいたことに感謝しながら、人間であることに誇りを持って生きていけますとこう、お母さんに叫んで、そうお母さんに言って、そして、ようやくですね、この母の期待に応える、人間として生きるという、その生き方をこれからしようかなというですね、まあ、そういう段階に入るという、まあ、そういう入り口に今、人類は立っておるというふうにですね、言うことができるわけであります。そういうところから、今、教育界は激動に入っておってですね、この何を教えたらいいのか、どう育てたらいいのかということをですね、もういっぺん、この考えなきゃならんというふうな、そういう状況に今、世界の教育界の現状はあるわけであります。**

**まあ、皆さん方も、この振り返ってみれば、また自分自身の意識の内容を見てみればね、その人間なのにね、人間の格ってなんですかと言われて、答えられますかということですよね。誰もこうですとは言えませんよ。習ってないから。われわれがそれを知らないだけじゃなくて、教えてる先生も知らないんですからね。教育学部の教授も知らないんですからね。知ってるのは、理性を成長させる方法だけなんですよ。人間の格はどうしたらできるのかっちゅうことを誰も知らないんですよ。まだそういうこの段階にしか、人類は立ち至っていないっちゅうことなんですね。だけども、言えることは、この人間は人間に生まれてきても、人間になれるかどうかわからない。育てられ方によっては、人の皮を着たけだものになるんだ。だから、生まれてから後に何を教えるか、いかに育てるかによって、人間はいかようにでもなる。だから、この人間らしい人間に育てようと思ったら、どう育てなきゃならんか。何を与えなきゃならんか。そのことをですね、このちゃんと考えて、そして、そうなるように育てるということをしなきゃならんから、必然的に人間には偽物、本物というものがあるんだということを前提にして、そして、本物になるように育てる。そのために何を教えるかっちゅうことを考えながら、育てなきゃならんというですね、そういう必然性が生まれてきます。**

**第３番目の理由は、人間は人格を持って生まれてくるのではない。人間は、おぎゃあと生まれたときには、動物学上の分類における、人類として生まれてくるのであって、おぎゃあと生まれたときには、まだ人格は持っていないんだ。生まれてから後にですね、人間の格を獲得して人間になる。生まれてから後に自らも努力し、また人間社会の中で育てられることによってですね、われわれは人間の格を獲得して人間になるというですね、まあ、そういうこの生き方をするのである。すなわち、人間は人間に生まれてくるのではない。生まれたときには、動物学上の分類における人類なんだ。そして、人間の格を獲得するのは、生まれてから後である。であるが故に、われわれはどういう格を獲得すればですね、人間になるのかということを、やっぱり考えなければならない。どうだってええじゃんというようなことは言ってられないと。どうなれば、人間になったと言えるのか。どうなることが、人間になることなのか。そのことを知らなければですね、人間を育てるっちゅうことはできません。**

**そういうことから、われわれは、人間として本物とはなんなのかっちゅうことを知って、そして、人間として本物になるようにですね、育てるという、そういう自覚、意識を持ってですね、人間を育てなければならないし、また自分自身も人間として本物とはなんなのかっちゅうことを知って、で、そういうこの内容を持つように、自分自身もそれに向かって努力していくという、そういう生き方をしないと、人間にはなれないということなんですよね。で、これが、まあ、学問的に言ってですね、なぜ人間に本物、偽物という区別を設けなければならないのか。どうして、われわれは本物の人間になるということを目指して生きる必要があるのかということの学問的根拠、理由であります。実際問題、人間でありながら、人間としての内容を持っていない人が非常に多いわけなので、まあ、そのことからですね、さまざまに人間関係において問題も出てくるしですね、なんちゅうやつやっちゅって、こう非難せないかんような、まあ、そういうふうな人間も出てくるし、というふうなことになってきてですね、この家庭でも、自分の育て方が悪くって、子どもがとんでもないことをしてしまうことになってしまったりということになってしまって、いろいろ事件、犯罪が起こってくるわけであります。**

**実際問題、教育と考えれば、子どもがどういう子どもになるかによってね、お父さん、お母さんの人生はまったく違ってしまうわけですよね。自分の家の中から犯罪者が出れば、もうお父さん、お母さんの人生は、もうまったくこれは狂ってしまう。また、親戚の端々まで結婚に差し支えてくるようなね、まあ、そういう状況になってくるかもしれない。非常に大きなですね、この迷惑が他人、同族にこう掛かってくるということに、まあ、なってくるわけであります。まあ、そういうことを考えるならば、自分がこの素晴らしいね、幸せな人生を生きることができるためにもですね、われわれは自分自身を素晴らしい内容を持った人間に成長させるという自覚を持って生きる必要があるし、またお父さん、お母さんや、家族や、親戚に迷惑を掛けないようなですね、あるいは、親戚や家族が誇りとしてくれるような、そういうこの人間になるためにもですね、またそういうこの人間の格というものを求めていかなければならないし、子どもを育てる場合にも、人間の格とはなんなのかっちゅうことを知っていなければならない。また社員教育をする場合でも、人間の格とはなんなのかっちゅうことを知っていないと、この本当の人間にいい感情を与えるですね、まあ、そういうこの人間性、人格というものを持った社員を育てることはできません。**

**人間にね、人間の格があるということが実感としてわかるのはどういうことなのかといったらですね、自分自身が犬猫のごとき扱いをされたらですね、むかつくわけですよね。まあ、それは、その人間には人間の格があるということが、潜在的にですね、わかっておるから、犬猫のような扱いをされるとむかつくわけなんですよ。だけど、犬猫は犬猫のような扱いをされても、むかついてませんからね。まあ、それでええんだというかですね、もうそういうこの意識で犬や猫はね、人間に犬猫扱いされても当然、当たり前ですから、それはなんもむかつきませんけど、人間はやっぱり、犬猫のようなね、扱いをされたらむかつきますよね。そこにやっぱり、人間には犬猫とは違う人間の格があるということを、自分はわかってなくても、命は知ってるんだということですよ。命はそれを求めてるんですよ。だから、その命の要求を満たすようなですね、まあ、そういう努力を人間なんだから、自分の命に対してそれをしてあげなければならないというね、まあ、そういうこのことになってきます。**

**まあ、そういうところから、まずですね、本物、偽物という区別を意識しながら、われわれは生きなければならないというね、まあ、そういうことを考えてほしい。全人類、人間はみんな同じ命のかたちをしてるんだ。だから、基本的な人間としてのですね、持つべき内容というものは決まってるんだということをですね、われわれは理解する必要があります。だけど、決まってるといってもですね、人間性というものは時代によって変わっていくんですよね。時代によって人間性は違います。だから、封建時代における人間性とですね、民主主義の時代における人間性とは、人間の持つべき内容は違ってきます。それはなぜかといったらですね、この人間性というものは、命に与えられておる潜在能力が、どんどん、どんどん、出てくることによって、人間は成長していく、進化していくというね、そういう歴史をつくっていきます。だから、命に込められた潜在能力のすべてが出尽くしてですね、初めて母なる宇宙がつくった人間とはこうだったんだということが言える。だけど、まだ母なる宇宙によって、人間が人間になるために与えられた潜在能力の１割強しか、まだ出てきてないんですからね。だから、今のわれわれを人間ということは、これは母なる宇宙の思いからすれば、まだ人間ではない。まだわれわれは人間への道を歩んでる途上人だというふうにですね、言うことができるわけであります。**

**お母さんがつくった人間にふさわしい人間というのは、その人間という命に与えられてる潜在能力が全部表現されて、初めてこの人間になったとこう言えるのであって、まだわれわれは、その人間への道を歩んでる途上人だというね、まあ、そういう意識を持っておる必要があって、今の自分を人間と思っておったら、とんでも８分、歩いて10分と申しましょうかですね、まだ傲慢なこの意識だと言わなければならない。いわゆる、われわれはまだいまだ人たり得ずというね、まあ、そういうこの状態にあるんだということであります。まだ自分の命の中にある潜在能力を出し切っていない。であるが故に、われわれは人間への道を歩む途上人である。いまだ人間たり得ず。まあ、そういうこの思いをですね、われわれは持って、本物の人間を目指して生きるという、まあ、そういう自覚が、今の人類には要求されてくるということに、まあ、なるわけですね。これが今ですね、人間として本物とはなんなのかということを考えなければならないということの、まあ、前提条件というか、プロローグね、導入部の話であります。**

**そういうことを考えればですね、どうだってええじゃんということは言えないと。やっぱり、みんなこの人間として本物というものを目指して生きるというですね、そういうこの意識を持ってないといけないんだということをですね、まずはそういうところからわかってもらいたいと思います。人間なんだから、自分の命に込められたですね、人間としてのこの母なる宇宙の思い、期待というものをですね、自覚しながら、その母なる思いに応える生き方をしなければならない。自分の命に込められた母なる宇宙の願いと祈りとはなんなのかを知って、その母なる宇宙の願いと祈りを実現する生き方。それが人間として生きるということなんだと。そして、母なる宇宙が自分に込めた願いと祈りとはなんなのか。それがこの命に込められてる潜在能力によって示されておるんだ。その潜在能力を引き出しながら、われわれは母なる宇宙の思いに応える生き方をしていく。そこに人類史があるんだ。そこに人類の歴史というものがあるんだ。そういうふうなですね、認識を基本的に持っておる必要があります。まあ、そういうことを前提として、じゃあ、この人間として本物とはいったいなんなのか。われわれが今、人間として本物の生き方をするということはどういうことなのか。そのことを次にですね、考えていかなければなりません。**

**で、そこで、まずですね、この人間には本物、偽物があるんだということが言えるならばですね、まず人間が本物の人間としての生き方をしようと思ったら、最初に求められる条件はなんなのか。最初の本物の条件はなんなのか。それは、人間として本物とはなんだろうというですね、そういうこの問い、意識を持っておるかどうか。そのことによってですね、この本物、偽物という区別ができます。人間として本物とはなんだろうと、問いを持っていなければ、その人は偽物。人間として本物とはなんだろうという問いを持っておったら、その人は自覚的に生きておるが故に、本物というふうにですね、言うことができる。人間として本物とはなんだろうかという問いを持っていなければ、どうだってええじゃんっていう言い方になってしまいますのでね、それは人間として生きるというよりは、流されてしまう生き方であって、生きてるんじゃない。時代のこの傾向性に流されてしまうというですね、まあ、そういうこの状態であって、生きてるとは言えないと。生きるということは、何かしら意志を持って、方向性を持って生きなければならないので、もうその意味で、この人間として本物とはなんなのかという問いを持っていなければ偽物。人間として本物とはなんだろう、問いを持って生きておったならば、自覚的に生きておるという、その自分のあり方を知ろうとして生きておるという意味において、本物の生き方をしてるというふうにですね、まずは言うことができるわけであります。**

**だから、まずは人間が生きる場合ですね、人間として本物とはなんだろうって、問いを持って生きてるかどうかということが最も大事なですね、根本の課題として問われるんだ。だから、もう小さいあいだから、子どもにはですね、人間として本物とはなんだろうという問いを持たせてあげる努力をすることが、まずは本物教育の出発点だということをですね、忘れてはなりません。お父さん、お母さんであったならば、もう０歳のころからね、子守歌のようにですね、人間として本物とはなんだろうね。もうそれを子守歌のように歌いながらね、子どもを育ててあげなければならん。で、その子どもの意識の中に、もう潜在意識としてですね、その言葉がもうインプットされてしまうというね、で、その子どもがもう無意識的にもですね、人間として本物とはなんだろうみたいなことをですね、ふとこう考えてしまうようなね、まあ、そういう傾向性をつくってあげたら、その子は絶対間違えません。その子は必ず、この人間としての道を踏み外さないね、素晴らしい人間になる努力をしながら生きていきます。本物の人間になれるかどうかはわかりませんけど、だけど、本物を目指す生き方をし続けることは確かであります。その問いがあればね。**

**というのは、なぜ問いが大事なのかといったらですね、答えというものは時代によって変わってしまうんですよ。また民族によっても違いますよ。また風土によっても違ってきますし、個人によっても違うかもしれません。だけど、人類が存在する限り、人間として本物とはなんなのか、問い自体は永遠になくなることはない。もうそういうこの重要な、これは意識であります。答えは変わる。問いは永遠だ。だから、哲学ではですね、答えのことを有形の知、かたちがあるから、かたちがある、有形の知、答えのことを有形の知というんですよ。この答えのことを有形の知。で、かたちがあるものは必ず滅びます。かたちがあるものは必ず滅びますので、有形の知は有限の知である。限りがある、有限の知である。答えは有形の知、有限の知。問いというのは、これはかたちがないからね、問いというのはかたちがないから、問いは無形の知。かたちがない無形の知。で、かたちがないが故に永遠だから、永遠の知っちゅうんですよ。問いも知なんだ。どういう問いを持って生きることが大事なのかというのも知識なんですよ。答えだけが知識じゃないんだ。問いも知識なんだ。**

**答えは有形の知、有限の知。問いは無形の、永遠の知。であるが故に、人類は、この人類が存在する限り、人間として本物とはなんなのかという問いをですね、持ち続けなければならない。全人類がですね、人間として本物とはなんだろう。全人類がそれを問い続けながら生きるということをですね、しなければなりません。その意味で、この人間として本物とはなんなのかという問いは、これは人類が存在する限り、忘れてはならないという意味でですね、人間存在における、人間存在における根源的な問いっちゅうんですね。人間存在における根源的な問い。人間として本物とはなんなのかという問いは、人類が存在する限り問い続けていかなければ、人類が成長しませんので、まあ、その意味で人間として本物とはなんなのかという問いは、人間存在における根源的な問いというふうに言うわけであります。**

**で、なぜこの人間として本物とはなんなのかという問いが大事なのかというとですね、もちろん、現実を生きていくためには答えも必要なんですけど、答えを持って、答えに縛られた人間は、自ら対立を呼び起こし、秩序を破壊するというふうなですね、まあ、そういうこの行動を取ります。答えに縛られた人間ほど恐ろしい存在はない。答えに縛られた人間ほど恐ろしいものはない。答えに縛られた人間たちが離婚をし、答えに縛られた人間たちが幼児虐待をし、答えに縛られた人間たちが宗教の、ドグマの違いで殺し合う戦争をし、ということになってしまってですね、答えに縛られることによって、人間は自分をも不幸にし、他人をも不幸にし、社会の秩序を崩壊させるというふうな、まあ、そういうこの行動を取り始めるわけであります。だけど、答えがなければ、現実は生きられません。現実を生きるためには、判断しなければならない、決断しなければならないから、そのためには答えは必要なんですよね。問いだけでは、この生きられません。だけども、答えを持って、答えに縛られた人間は、自らを不幸にする。人間であって、人間でありながらというか、人間として答えに縛られることほど、人間として恐ろしいものはない。答えに縛られる、自分がつくった答え、自分の理性で考えた答えに自分が縛られれば、それは固定観念、先入観念となって、自分がそれに縛られてしまって、固定化されてしまって、そして、この成長が止まる。答えを持ってしまって、それで安堵すれば、そこで成長は止まるんですね。そして違う答えを持った人間と対立をしてしまう。**

**答えに縛られれば、確実に人間には傲慢さが出てきます。傲慢、慢心ほど、人間にとって恐ろしいものはない。社会においてですね、この社会において、地位を極めながら、失脚する人間はすべて傲慢さ故です。いかに傲慢な言動というものが、人間として恐ろしい結果を引き起こすかということはですね、そういう社会におけるさまざまな事件を見てもわかるわけであります。答えを持って、答えに縛られた人間ほど、恐ろしいものはない。だけど、答えがなければ、現実は生きられない。だから、どうするかっちゅったら、答えがなければならないんだけれども、だけど答えを持ちながらも、答えに縛られないためには、なおかつ問い続ける。本当にこれでいいんだろうか。本当にこのままでいいんだろうかという問いをですね、持たなければならない。**

**100年前はちょんまげだったんですよね、まだね。それが100年たったら、こんなに変わっちゃうんだ。あらゆるものが変わるんだ。学問において真理といわれるものでもですね、昨日まで真理であったものが、今日はうそになってしまう。それが学問の進歩だ。真理すら変わる。何一つ変わらないものはない。何一つ変わらないものはないんだ。だから、答えに縛られるほど、愚かなことはないんだ。あらゆる答えは全部変わる。かたちあるものはすべて変化する。かたちあるものはすべて滅びるんだ。人類もやがては滅びる。あらゆるものは、最後はなくなってしまうんだ。何一つ、永遠のものはない。すべては変わる。かたちが変わるんですよ。命そのものは永遠に存在するんですけどね、だけど、命のかたちが変わるんですよ。だから、進化のプロセスを見ればね、その古代の生物はいなくなってしまって、どんどん、どんどん、新しい生物が生まれてくる。それが命の歴史であります。かたちあるものは、必ず滅びる。かたちあるものにおいて、永遠はない。だから、自分がどんなに正しい答えを持っておると思ってもね、その答えは永遠ではない。必ず変わるのである。限界があるのである。絶対じゃないんだ。だから、自分がどんなに正しいと思っても、本当にこのままでいいんだろうか。本当にこの答えで正しいんだろうか。まあ、そういう問いだけは常にですね、持っていなければ、答えに縛られれば傲慢さが出てくる。傲慢になれば、確実にほかの考え方や価値観の持った人間と対立してですね、そして、このお互いに嫌な感じになってしまう。自分の周りに嫌な人間が増えてくれば、自分は不幸だ。また考え方の違いや、価値観の違いや、そういう違いというものがですね、結果として感情と結び付けば、感情的対立が生まれてきて、最終的には殺し合いになってしまう。それが戦争だ。戦争する人間はみんな答えに縛られた人間たちだ。自分と違う答えを認めない、許さない。それが答えに縛られた人間の恐ろしさであります。で、そういう人間は、これからの個性の時代は生きていけません。**

**個性の時代というのはですね、いろんな考え方もあってもいい。いろんな価値観があってもいい。まあ、それが個性の時代ですからね。だけど、人間として、この持たなければならない人間性は共通したものなんですよ。それはどういうことなのかといったらですね、いろんな考え方もあってもいいんですけどね、だけど、人間の命の根源から湧き上がってくる欲求とはなんなのか。人間の命の根底から湧き上がってくる欲求というのは、みんな、できることならば、みんな仲よく、信じ合って生きていきたいもんだ。これが命の欲求なんですよ。なんでその欲求が命から湧いてくるのか。それは、それこそまさに、この人間という命をつくったですね、母なる宇宙の願いがそこにあるからだ。すなわち、人間としてみんな仲よく信じ合って生きていきたいもんだ。これが母なる宇宙が人間に与えた人間性です。人格です。人格があったならば、人間の格がある生き方をしようと思ったら、われわれはこの自分の命の根源から湧き上がってくる、できることならば、人間としてみんな仲よく、信じ合って生きていきたいもんだという、この願いをどうしたら実現できるだろうか。そういう思いを持って生きなければですね、人格がある、人間の格があるとは言えないんですよ。そういうこの思いを持って生きなければ、この自分自身がこの命を自分に与えてくれた母なる宇宙の思いに応える生き方をしてるとは言えないんですよ。母なる宇宙の願いと祈りに沿って生きてるとは言えないんですよ。**

**離婚したり、幼児虐待したり、違う考え方の人とは一緒にやっていけない。価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずがないじゃないかといって、それは母なる宇宙の期待を裏切る生き方をしてるんだ。俺は人間じゃない。そのことを証明してるんですよ。人間であるならば、この命の根源から湧き上がってくる、できることならば、みんな仲よく信じ合って生きていきたいもんだ。どうしたら、それができるんだろうと、理性を手段能力に使って考えて、こうしてみようか、ああしてみようか、こうしたらどうだろう、ああしてみたらどうだろう。それが人間的ということなんですよね。また、それが愛である。それが人間性である。そうしないっちゅうことは、人間性がないんですよ。違う考え方の人とどうしたら一緒にやっていけるかな。それを考え始めたら、人間性がある。もう考え方が違うんだから、これはもう一緒にやっていけない。諦めてしまったら、そこでその人は人間ではなくなるんですよ。いわゆる母なる宇宙の思いに応えていないから。**

**全人類共通する、この命のかたちに秘められたですね、人格とはなんなのか。それはできることならば、みんな仲よく信じ合って生きていきたいもんだ。これが人間の格を示すですね、根本の原理です。どんな人間からでも、けんかしたいとかね、対立したいとかね、殺し合いたいとかね、そんな欲求は湧いてきませんよ。それは後天的に人間が自分のこの意志に基づいてね、生きることをし始めてから対立するんですよ。生まれながらに対立して生まれてくる子はいませんからね。生まれたときは、みんな純粋無垢な、天真らんまんな、清らかな瞳を持って、皆、生まれてくるわけですよ。全宇宙、あらゆるものに対する絶対的信頼を持って生まれてくるんですよ。信じなければ生きられませんからね。生まれながらにけんかしたい人はいませんよ。生まれながらに対立してる人はいません。人間の命の根底から湧き上がってくる、母なる宇宙が人間に与えた人間性、人格、これはできることならば、みんなと仲よく信じ合って生きていきたいもんだという、この思いがですね、この人間に、人間らしく生きるという生き方をさせてくれる。それが母なる宇宙の、自分が産んだ子どもへの願いなんですよ。母なれば、自分の生んだ子どもたちがみんな仲よくね、信じ合って生きていってもらいたいと願ってるはずなので、その子どもたちがお互いに殺し合ってるなんて、お母さん、悲しい。泣いてますよ。**

**確実に今の時代の人間の生き方は、母の思いを裏切っております。そのことをですね、われわれは自覚しないと、本当に人間として素晴らしい生き方、人間らしい生き方とはなんなのかということがなかなかわかってきません。なんでけんかしたらいかんのや。なんで対立したらいかんのや。だけど、人間は考え方が違うから対立をする。それは致し方がない。だけど、対立しっ放しではいかん。どうしたら、対立せんとですね、お互いに考え方が違っても、仲よくやっていけるかなと考えるのが愛だ。そこから愛が生まれてくる。同じ考え方の人とばっかり付き合っておったんでは、そこには愛は存在しない。相手が自分と同じように考えてくれなかったら、その人を愛せない。これは自分しか愛せない人間だ。それは決して母の期待に応える生き方ではない。自分しか愛せないから、他人と対立するんだ。他と対立するんだ。たくさんの人間が、お互いに顔も違う、性格も違う、考え方も違う、宗教も違う。そこで生きていこうと思うと、どうしたらいったい違う人と一緒に仲よくやっていけるんだろう。それを考えないと、人間社会は崩壊しますよね。秩序は保てません。**

**まあ、そういう意味で、とにかくは、まずはですね、この答えに縛られることの恐ろしさというものをまず知ってもらいたいです。自分が出した答えに自分が縛られてはならない。答えに縛られるということは、理性に縛られることなんだ。理性的になってしまうことなんだ。人間でなくなることなんだ。われわれは答えに縛られてはならない。答えを支配しなければならない。理性を支配しなければならない。理性に縛られてしまったら、また理性で出した答えに自分が縛られてしまったら、人間でなくなることなんだ。答えに縛られた人間たちが離婚するんですよ。考え方が違うっちゅって。感じ方が違うっちゅって。性格の不一致ですなんてことを言って。どうしたら性格の違う人と一緒に生きるかを考えることによって愛は生まれてくるんですよ。同じ考え方の人としかやっていけない。その人は自分しか愛せない人間なんだ。違う考え方の人とどうしたら一緒にやっていけるんだろう。そこから愛が生まれてくる。そこから心遣いが生まれてくるからね。愛とは心遣いですから、相手のことを思いやるのが愛ですからね。そこからしか愛は生まれてこないんだ。**

**だけど、人間は不完全だからね、ついつい対立をしてしまうんですよ。対立すること自体はべつに悪ではないんですよ。だけど、対立しっ放しで、しょうがないじゃんと言うとったら、それは悪なんですよ。自分と対立してる人とどういうふうにしたら仲よく一緒にやっていくことになるんだろうか。こうしてみようか、ああしてみようかと心遣いをしとることが愛をつくることなんですよね。そこから人間らしく生きるということが始まるわけであります。絶対に答えに縛られたらいかん。自分と違う考え方が出てくれば、一応むかつくんですよね。これは人間は不完全だからね。むかつくんだけど、むかつきっ放しじゃいかん。どうしたらむかつかんで、その考え方の違う人と共に仲よく生きていくことができるんだろう。まあ、そのことをですね、考えていかないと、人間らしい生き方、人間の格がある生き方、人間性を持った生き方というのはできません。これはもう愛のところでね、十分に何回も何回も繰り返してお話をしたことですからね、このもうわかっていただいてると思いますけども、とにかく愛とはなんなのか。他者と共に生きる力だ。短所を責め合わないで。短所を責めてたら地獄だ。短所は助けてあげようと。相手の長所を発見して、長所と関わっていこう。愛するとは、短所を許すことだ。そして、長所と関わることだ。そういう愛の本質についてはね、何回もこれはもうお話をしました。**

**まずは、この自分が答えに縛られた、そういう醜い生き方をしないということをですね、まずは心掛けてもらいたい。答えに縛られれば、確実にこの人間関係は壊されてしまいます。恋愛もそのことによって、愛しておりながら別れてしまうんですよ。答えに縛られた恋人たちは。愛してるんだけど、考え方が違ってくる、感じ方が違ってくる。最もこれは違うと思ってですね、その理性に支配されて恋をなくしてしまう、愛を放棄するんですね。これが現代人の悲しい、この生き様であります。われわれ、理性を支配しなければならない。愛は理屈を超える力なんだ。理屈よりも素晴らしいものが愛なんだ。理屈に負けてどうするんやと。人生に負けてどうするんや。愛は勝たないかん。だのに、今の人たちは理屈で愛を放棄するんですよ。だから、自分が不幸になるんですよ。理性的になればなるほど、個性がなくなる。理性的になればなるほど、人間性は破壊される。理性的になればなるほど、心遣いはしなくなるから、心が喪失して人間性が破壊され、心の喪失、そういう状態になって、自分が不幸になってしまう。心ない人間になるからね、心ない人間になるから、だから、不幸になるわけですよ。**

**理性的になれば必然的にそうならざるを得ない。われわれは理屈を超えて生きなければならない。理屈に支配されてはいかん。理屈は手段能力として使うもんだ。どうしたらいったい考え方の違う人と仲よく生きていけるんだろうな。それを考えるのが理性なんだ。考え方の違う人とやっていけないということを言うのは理性じゃないんだ。理性的な理性はね、考え方の違う人とやっていけないっちゅうんですよ。人間的理性はそうじゃない。人間的理性は、考え方が違う人とどうしたら一緒にやっていけるかな、こうしてみたらどうだろう、ああしてみたらどうだろうというのが人間的理性なのね。それが人間が理性を支配するっちゅうことなんですよね。で、人間が理性に支配されたら反対で、考え方の違うやつは気に入らんと。気に食わん、むかつく、やっていけへんという判断をするのは理性ですよね。人間が人間であることを忘れて、理性に支配されて、理性の奴隷となって、人間をやめたら、考え方の違う人とはもう絶対やっていけません。考え方が違ったら、むかつきます。殺し合いますよ、そうしたら。**

**そうならないためには、われわれはこの答えに縛られてはならない。固定観念、先入観念に支配されてはならない。固定的な答えを持ってはならない。固定的な意識で人を見るっちゅうことは相手を殺すことなんだ。あいつはこういうやつだという目で見たら、その目で相手を縛ることになってしまって、相手が成長し、変化することを自分が阻害する、自分が邪魔する、自分がその相手が変わらないように、相手を固めてしまうことになってしまう。変化しないっちゅうことは、死を意味しますから、相手を固定的な目で見ることは相手を殺すことなんだ。相手が変化して成長することを認めることが愛だ。相手が反省して、成長していくことを認めて、失敗や罪を許すことが愛だ。愛のない人間は、相手を固定的に見て、そして、その人の失敗を責める。相手が変化する、成長することを待てない。待つことも愛だ。まあ、とにかくまず本物の印としてね、まず何が要求されるのかといったら、答えに縛られてはならない。だけど、答えを持たなければ、現実は生きられない。だけど、答えに縛られてはならない。そのために、われわれは答えを持ちながらも問いを失わない。問い続ける。そこに不完全な人間における誠実な生き方が生まれてきます。答えを持ちながらも、果たして本当にこれでいいんだろうか。それが不完全な人間の誠実さをですね、示す意識であります。答えがなかったら生きられない。俺はこうだと言わなければならない。だけど、その答えに縛られたら、その人は対立をつくり出して、自分が不幸になり、相手をも不幸にし、そして、組織や社会の秩序を破壊する。そして、自分の成長が止まってしまう。いいことなしだ。だけど、残念ながら、ほとんどの人たちが、現在のところは、答えを持ってほっとしてですね、ようやく答えにたどり着いたと思って、答えを持ってほっとして、そして、その答えが絶対だと思って答えに縛られてしまって、そして、自分と違う考え方の人とうまくやっていけない。まあ、そういう状態に陥ってるのが、今のですね、人類の姿であります。だから、戦争はなくならない。違いを理由に戦うというですね、まあ、そういうこの意識がなくならない。ちょっとした違いが認められない、許せない、むかつく。これは確実にもう人間が偽物になってしまったですね、証明であります。**

**個性の時代なんだから、どんな考え方を持っててもいいんだ。どんな性格でもいいんだ。どんな感じ方をしてもいいんだ。どういう価値観を持っていてもいいんだ。だけども、母は何を願っておるかといったら、みんな仲よく、信じ合って生きていってもらいたい。それをお母さんは願っておるんだ。だから、全人類の命の根源から湧き上がってくる欲求は、できることならば、みんなと仲よく、信じ合って生きていきたい。これがこの全人類に共通する人間の叫び、人間性の叫び、母なる宇宙の願いというものであります。で、これがいわゆる母から人間に与えられた人間性であります。その人間性とは愛なんだ。みんな仲よく信じ合って生きていってもらいたい。みんな仲よく信じ合って生きることが愛だ。愛を持って生きることを母は願ってるんだ。また宇宙はコスモスといってですね、秩序を持ってるもんだ。秩序は愛だ。秩序を壊す働きは、これは愛がない、憎しみ、対立、戦争、それが秩序を破壊する。答えを持ちながらも、なおかつ問い続ける。**

**こういうのはですね、理性で考えたら、答えを持ちながらも問うっちゅうのは、これは矛盾なんで、答えに到達したら、問いはなくなるはずだとね、思うのが理性なんですよね。だけど、人間は不完全ですから、答えを持って、そこで安堵すればですね、人間は完全性をですね、この実現したようになってしまいますので、それでは不完全な人間の生き方はできないのね。だから、答えを持ちながらも、なおかつ問い続ける。理性的にはこれは一見、矛盾に見える。だけど、これがこの宇宙が持っておる真実の姿なんだ。理性というのは、矛盾を排除するし、矛盾をなくそうとする。で、理性で考えたら、この善はいいけど、悪はいかん。うそは言うたらいかん。表はいいけど、裏はいかん。清らかなのはいいけど、濁っとったらいかん。清はいいけど、濁はいかん。それが理性で考える価値観なんですよね。確かに、善はいいけど、悪はいかんのだ。悪いことはしたらいかんのだ。だけども、悪はなくならないのが現実である。宇宙というのは、プラスもあり、マイナスもある。マイナスとプラスがお互いにこの協力し合いながら、宇宙の秩序を模索してつくっておる。これが宇宙の姿である。宇宙は真理では生きていないんだ。宇宙は矛盾を内包した真実の世界だ。宇宙は真理では生きられないんだ。**

**真実の世界というのは、プラスがあったらマイナスがある。表があったら裏がある。善があったら悪がある。真に偽、美に醜、上には下、右には左、前には後ろ、表には裏、清には濁、これが真実の世界であって、真実の世界は矛盾を内包しておる。で、こういう世界のことをですね、ちょっと難しい表現をすると、絶対矛盾の自己同一というんですよ。絶対矛盾の自己同一。長所も短所もあっていい。長所も短所も生かして生きることがですね、この人間的に生きるっちゅうことであって、長所はいいけど、短所はいかんと。短所がなくなってしまったら、人間じゃなくなってしまう。だから、人間というのは、絶対矛盾の自己同一なんだ。長所も短所もあって人間なんだ。短所をなくしたら、人間でなくなってしまう。理性で考えたら、長所はいいけど、短所はいかん。理性で考えたらそうなんだ。だけど、人間でありながら、短所がなくなってしまったら、人間でなくなってしまうんだ。だから、人間は長所も短所もあって人間なんだ。長所、短所、半分ずつあって人間なんだ。それが絶対矛盾の自己同一というね、まあ、そういうこのあり方であって、これが宇宙なんだ。宇宙もマイナスエネルギーとプラスエネルギーがお互いに対立しないで、協力し合って宇宙の秩序をつくってるというのが宇宙の姿。これが真実の世界だ。**

**真理で考えたら、プラスはいいけど、マイナスはいかんのだ。長所はいいけど、短所はいかんのだ。善はいいけど、悪はいかんのだ。だけど、悪がなくなったら、宇宙は崩壊する。悪がなくなれば、あらゆるものが生きられない。生きるということができなくなってしまう。悪があるから、事故が起こるから、世の中は発展し、成長し、変化して生きるということができる。変化がないということは、死んでるんですよね。だから、問題も事故も犯罪も悩みもなくなってしまったら、もうそこで終わりなんだ。なんで事故は起こるのか。それはどういうところに問題があるかを教えてくれるんだ。事故があって初めて、ああ、ここに問題があったんやなとわかるわけですからね。だから進歩するんですよ。犯罪が起こるのも、今の社会の問題点がどこにあるのかを犯罪者は教えてくれるんだ。だから、大きな宇宙の目から見たらね、みんな必要だから生かされて生きておって、犯罪もし、事件も起こしですね、事故も起こし、悪も成して、そして、みんなが協力して、よりよい社会を目指していくというのが人間社会なんですよ。だから、もっともっとわれわれは、犯罪者に感謝しなければならない。すなわち、命を張って、今の社会の問題点がなんなのかっちゅうことを教えてくれてるわけだからね、だから、われわれは、自分に代わって罪を犯してくれてると思ってですね、どこが悪いかを彼らは教えてくれてるんだ。ありがとうなんちゅうようなことを言って、感謝せんないかんと。そういうこの構造に宇宙はなってるんですよ。それが真実の世界なんですよ。**

**真実の世界は矛盾を内包する。だから、答えを持ちながらも、なおかつ問い続ける。これは理性でいったら矛盾なんだけど、それが正しい、それが人間的に正しいっちゅうことなんだ。真理では生きられない。真理で考えたら、善はいいけど、悪はいかんのだ。だけど、どんな善も完全な善はない。どんないいことをしても、必ず誰かに迷惑が掛かるんだ。小泉さんがどんなに素晴らしい改革をしても、改革というものは、そのことによって得をする人間半分、またその改革によって不利益を被る人間が半分出てきてしまうのがね、避けることのできない現実であり、事実なんだ。変化があれば、必ずその変化というものは、得する人間と損する人間ができてくるわけですよ。みんな得っちゅうのは、絶対あり得ないんだ。進化は退化を伴う。尻尾がなくなるっちゅうのは、進化だと思うけど、なくなったほうからすれば、退化ですからね。まあ、この矛盾を内包した真実を生きるというね、この力を持たないと、われわれは人間らしく生きるというね、血の通った温かな心を持った生き方ができません。**

**その基本原理がね、この答えを持ちながらも、なおかつ問い続ける。答えに縛られた人間ほど恐ろしいものはないという、この人間観に表現されるわけであります。ぜひこの自分の固定的な判断で自分の成長を止めないように。答えを持っておっても、なおかつ、本当にこれでいいんだろうかという、この問いを忘れないように。それは相手への心遣いであり、また自分が愛を持ち続けるための基本原理なんですから。問いを忘れないことが愛なんだ。果たしてこれでいいんだろうかと、そう思うことによってですね、われわれは自分の答えに縛られないで、自分と違う答えから、何か学ぼう、教えてもらおう、学び取ろうという、そういう気持ちになることができます。相手から学ぶことが愛だ。そして、相手から学んで、自分の答えを成長させたり、自分の答えのゆがみを修整したり、まあ、そういうですね、この生き方ができる。そこに人間の成長がある。**

**感性論哲学というのは、感性というものをですね、重要視する、まあ、そういう哲学で、もちろん、理性も大事なんだけど、その理性は手段能力だ。感性が俺だ。感性こそ自分だ。本音と実感が自分だ。理性はみんなに共通する能力だから、理性的になればなるほど、俺はなくなってしまう。これから個性の時代なんだから、感性を原理にして生きる力をつくっていかなければ、個性の時代は生きられない。理性的になれば、個性がなくなってしまう。画一化されてしまう。だから、個性の時代を生きる力は理性ではない。感性だ。感性とはなんなのか。感性は問題を感じる力だ。問うのは感性、答えを出すのは理性だ。だから、感性論哲学においては、答えも大事だけど、答えよりもっと大事なのは問いだ。問いを忘れたら、人間は人間ではなくなってしまう。答えに縛られたら、人間は死んでしまう。いわゆる殺し合うんだ。そういう意味でですね、感性論哲学であるが故に、なおかつ、この問いは大事だ。だから、問いは大事だということをですね、強く言わなければならないんですよ。そして、理性で出した答えに縛られてはならない。われわれは理性を支配しなければならないんだ。**

**まあ、ここに本物の人間としての生き方のね、原点があるということを、ぜひですね、忘れないで、覚えておいてもらいたいんですよね。だけど、問いだけを持っておっても、問題意識だけ持っておっても、本物ではありません。問題意識を持ってるだけ、問いだけ持っておるだけでは偽物です。また答えを持っておるだけでも偽物です。答えを持ちながらも問うから本物です。こういうややこしいね、この存在が人間なんだ。だから、そこにこの愛というものがね、要求されてくる。そういうこの素晴らしい世界になることができる。ぜひ、その部下と接する場合でもですね、自分の答えを押し付けてはならない。部下の意見にも耳を傾けて、自分の答えに縛られないで、部下から何かを学んで、部下の意見の何かを取り上げて、そして、その部下を喜ばせて、そして、部下に教えてもらって、自分を成長させて、君と出会えてよかった。俺は君からこれを学んで、僕はこんなに成長できた。ありがとうと言って、部下に感謝する。そういうふうなね、この掌握力というかですね、統率力というものをつくっていってもらいたいと。**

**自分の答えに縛られればね、支配という構造をつくってしまう。それは部下を苦しめることだ。上司であるならば、部下の反論を許さなければならない。親であるならば、子どもの反抗を許さなければならない。でなければ、人間は育たない。子どもというのは、前々から申し上げてるようにですね、この新しい時代をつくるために生まれてくるんだ。新しい時代をつくろうと思ったら、今まで誰もやったことがないことをしなければならない。いつまでも常識に従順で、先生や親の言うことをいつまでも聞いておったら、新しい時代はつくれない。だから、子どもというのは、反抗する力を生まれながらにちゃんと命にプログラミングされて生まれてくるんだ。第１反抗期、第２反抗期、反抗しながら自分を確立する。親に逆らい、先生に逆らいながら、俺の考えはこうだ。俺の価値観はこうだ。俺の欲求はこうだということを自分自身が気付き始めて、そして、自分らしい自分というものをしっかり自分が意識して、そして、自分らしい自分の人生を生きるということができていく。それが子どもの人生だ。**

**教育は反抗を恐れては教育はできない。親は子どもの反抗を恐れてはならない。もちろん、反抗をさせてあげながら、自分とは違う子どもの考えを褒めたたえてですね、生まれたときにはなんも考えられなかったのに、そんなことを考えることができ、そんなことを言うことができるところまで君は成長したのか。すごいやないか。お父さん、うれしいなんちゅうようなことを言ってね、で、その子どもの違った考え方を認めてあげて、だけど、子どもの考えはまだ幼稚である。だけども、その幼稚だといって、それを否定しないで、その考え方をもっともっと成長させてあげるために、親は自分の考え方を捨てて、子どもの考え方を成長させるために協力し、アドバイスし、またこの本を読んでみたらどうだ。こういう人に会ってみたらどうだっちゅうて、その子の考え方を、その子を伸ばしてあげるためにね、協力してあげて、金を出してあげる。それが教育だ。それが親だ。これが矛盾を生きるということですよね。自分と違う考え方の人間に協力して、その人の考え方を伸ばしてあげる。それがこの愛を持った矛盾を生きる力、宇宙の力であります。**

**答えに縛られたら、命を殺す。不幸になる。自分が不幸にならないためにも、答えに縛られてはならない。なおかつ、問い続ける。本当にこれでいいんだろうか。そのことによって、他人から学ぶ。まあ、そういうふうなね、この本物の生き方というものの基本原理をですね、まずしっかりと押さえてもらいたいと。これは組織の中で生きる場合も、ものすごく大事な基本原理です。ある程度、教育は人に教えなければならない。だけども、教えながらも、なおかつ、それに対する反論というものもですね、認めて、許して、人の言うことに耳を傾けて、そして、現実はあらゆるものは変わるんだから、あらゆるものを変えていこう、発展させていこう、成長させていこう。その思いだけは持ち続けなければならない。そのためにわれわれは問いをなくしてはならないんだ。というところで、前半の話は終わります。ここで休憩に入ります。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、今日の後半の話に入ります。まあ、とにかく今、この答えを持ちながらも、なおかつ問い続けるという、この絶対矛盾の自己同一というですね、この人間を生きるという生き方の基本というものを、お話をしました。で、その問いの重要性ということの中でもですね、この最も人類として根本に据えなければならない問い。これがこの本物を目指すというですね、いかなるものにおいても本物を目指す。これは、まあ、基本的にはですね、今の時代が量から質へとこう転換しておる。あらゆるものにおいて質の向上というものを目指すことがですね、究極の、まあ、課題、目標となっておる。まあ、その意味においてもですね、このいろんなもののあり方においても、やっぱり本物を目指すというね、この本物を追求するっちゅうことは、今の時代のトレンドとしてすごく重要な課題であります。自分としても本物を目指す。正義においても本物を目指す。偽物というものを認めないというね、まあ、そういうふうな、この意識で本物を追求するということによってですね、消費者の要望に応え、また自分をも成長させていく。まあ、そういうふうなことは、これは今の時代のですね、要求として、基本的に忘れてはならないことです。まあ、そういうところから、こう人間として本物とはなんなのか。そういう意識をつくっていけばね、ただ自分自身が本物になるというだけじゃなくってですね、仕事の面においても、いろんな面において本物を目指さなきゃならんというふうな、まあ、そういうこの質の向上を実現する生き方というものが自分の身に付いてくるように、まあ、思うわけですね。**

**とはいえですね、今のところ、とにかくは一応、人間皆、自分のことを人間だとこう思ってるわけなんですよね。だけど、本当はこのわれわれは、人間への道を歩んでる途上人であって、いまだ人間たり得ずというのがですね、その本当の姿であります。だけども、一応われわれ、自分のことを人間だと思っておる。で、これはそのある意味でですね、この現実を生きるためには答えを持たなければならない。その意味で、この人間への道を歩んでおる途上人だという、この意識だけではですね、現実に対していろんな判断、決断ということをしていくことができませんので、一応、人間だというこの意識は非常に重要で、今を生きる人間として、その人間としての本物というのはいったいどういうあり方をしておるのか。これは、やっぱり、自分自身が今を生きる人間として自分が本物の生き方をするためには、何らかの意味での答えを持たなければならないんですけども、だけど、この俺は人間だというこの現実の自分に対する意識というのは、そういう意味では、まだ、じゃあ、なんでいったい人間と言えるのと、こう言われた場合にですね、うーんとこう詰まってしまうというか、答えを出せない。まあ、そういうこの状態で、ただただ人間のかたちをしてるから、俺は人間だという、そういう常識的な意識を持ってるだけなんですね。**

**だけども、この基本的に根拠のない知識、根拠のない技術、根拠のないこの意識というものは、人間に本当の生きる力を与えてくれない。やっぱりその根拠が明確になることによって行動力が生まれてくる。根拠が明確じゃないとですね、なんとなくこの自分自身がぼやっとこう、ぼけっとしてというか、なんかこう確信が持てないというね。まあ、そういう状態で、この意識がぼんやりしてきます。というか、確信が持てないのでね、行動力、やる気というふうな、そういうこの行動力に結び付いてきません。そういう意味で、やっぱり知識というものは、根拠を明確に持って、そして、この生きるということは非常に大事なことなんですよね。そういうふうに考えていくと、私は人間であるとこう思っておる自分の今日の意識というのは、これは根拠のない常識だと。であるが故に、われわれは、根拠を明確にこの自覚しなければですね、本当に現実を自信を持って堂々と生きる力というものをつくっていくことはできません。まあ、そういうところからですね、哲学においては、常に根拠を明確にして、自信をつくり出すというね、まあ、そういうことのために哲学は常に常識に対して常識を考えるというね、そういうことをすることが大事だということを、まあ、言うわけであります。**

**常識で考えておったのでは、何事も変化しない、成長はしない。常識を考えるということをすることによって、初めて現実に変化が生まれてくる。そして、現実の常識を破壊して、より素晴らしいものをつくり出していくという、そういう動きが出てくるわけですね。もうその意味で、歴史の中でこの時間というものを原理にして、歴史の中で生きる人間、しかも、この歴史をつくるために生まれてきたわれわれは、常に常識に縛られることなく、答えとしての常識に縛られることなく、この常識を考えて、自分を成長させ、社会を成長させ、新しい時代をつくっていくというですね、そういう生き方をしなければなりません。その意味でですね、まずわれわれは、そういう自信を持って現実を生き切るためにもですね、自分の持ってる答えに対して、根拠というものをですね、明確にこの自覚しながら、その答えを持って生きるということを、まあ、していく必要がある。だけども、いかに根拠を与えられたからといってですね、その答えに縛られては、また進歩が止まってしまう。まあ、そういうこのところが、矛盾というものを抱えたですね、真実の生き方として非常に難しいところですけども、でも、それはそんなに難しいっちゅうことじゃなくって、そのことさえちゃんとわかればなんでもないことなんですけど、まあ、とにかくは、この今、自分の持ってる知識に明確な根拠を与えていく。そして、今を生きる自信をつくっていく。だけど、なおかつ、本当にこれでいいんだろうかという問いを忘れない。まあ、そういうふうなですね、生き方をしなければならない。**

**そこで、まず、われわれは、今、自分のことを人間だと思ってるんだけど、それにこの本当のですね、この自信、確信というものをこう与えていってですね、今を生きる人間として、どういう人間性を持てばよいのかということをね、やっぱり考えていかなければなりません。今を生きる人間として、本物とはなんなのか。そのことを考えていく必要がある。常に問いには答えが必要なんですよね。答えのない問いは、カオスというか、漠然としたこの不安定さをね、人間にもたらす。だから、必ず問いを持っておれば、答えがなければならない。そういう意味で、今を生きる人間としてどういうこの答えを持ったらいいのか。まあ、そのことを考えていくためにもですね、われわれは常識という根拠のない、その意識に縛られることなくですね、明確なその答えというものをですね、根拠として求めていかなければなりません。まあ、そういうところから、この自分は人間だと思ってる、この常識的なですね、この言葉を、常識を考えるという、そういう問いに変えていったらどうなるのかということなんですよね。私は人間であるという答えに縛られないためにね、どういう問いを持ったら、その答えに縛られることなく、自分を成長させることができるのかといったらですね、私は人間であるというこの答えを問いに変えたらどうなるのかっちゅったらですね、人間であるとはどうあることなのか。どうあれば、人間であると言えるのかというふうに持っていくと、その答えは問いのかたちに変わっていってですね、自分の意識を成長させてくれるという、まあ、そういうことになっていくわけであります。**

**そこでまず、私は人間であるというふうに思っておる人間においてですね、人間であるとはどうあることかということを問題にすることは避けて通れないこの必然的な課題なんだということをまず、また考えてもらう必要があります。自信を持って、私は人間だと言うためにはですね、人間であるとはどうあることかっちゅうことを考えて、俺ならこう思うという答えを持って、そのことによって、だから俺は人間だと言えるじゃないかというふうにですね、この主張することができます。まあ、そういうふうな意味でですね、この自信を持って俺は人間だとこう言うためには、人間であるとはどうあることかという問いを持って、俺ならこう思うという答えを出さなければならない。答えがなければ現実は生きられませんので、答えを出さなければならない。人間であるとはこうあることだ。その答えを持って初めて、だから俺は人間と言えるというですね、まあ、そういうこの自信が生まれてくるわけであります。で、これは単に本物の人間を目指すというだけのことではなくってね、あらゆる活動において、自分の持っておる知識、技術、意識というものに根拠を与えていくという努力は、これは人間が自信を持って仕事をし、自信を持って言葉を発し、自信を持って行動し、生きるためにですね、どうしてもなければならない重要な課題であります。根拠を明確にする。**

**その意味で、私は人間であるというこの意識に対してでもですね、じゃあ、人間であるとはどういうことなの。どうあれば人間であると言えるの。まあ、そういう問いをですね、まず自分が持たなければならない。そして、自分なりに、俺ならこう思う。私はこう思うという答えをですね、そこで出す必要があります。これ、人間と言うと漠然とするんですけども、この人間というのをですね、もっと現実的に言って、男とはなんなのか、女とはなんなのかね、人間、男であるっちゅうことはどうあることなのか。女であるということはどうあることなのか。まあ、今はジェンダーフリーといってですね、男と女の性差をこの考えてはならないと。みんな、男女平等で、その垣根を取っ払わなきゃいかんっちゅうような、そういう意識をね、持ってらっしゃる方も随分いらっしゃいますけど、だけど、やっぱり、女と男は肉体が違い、またいろんな機能が違う。その意味では、役割分担というかですね、そういう違いを明確に意識した、そういうこの活動、言動というものが、当然、この出てこなければおかしいわけなのでね、まあ、その意味では、女であるっちゅうことはどうあることなのか、男であるっちゅうことはどうあることなのか。まあ、そういうこともですね、やっぱり男として生きる、女として生きるためには、問わなければならない重要な課題ですし、また経営者であるっちゅうことはどうあることなのか。社員であるっちゅうことはどうあることなのか。部長であるっちゅうことはどうあることなのか。課長であるっちゅうことはどうあることなのか。まあ、そういうですね、今、自分に置かれておる立場において、どうあることが本物なのかということをですね、自分で問うていく。これは現実的にものすごく大事な仕事上の意識であります。**

**まあ、そういう意味で、自分の今の生き方を明確化していくためにも、何をせないかんのかっちゅうことをですね、明確化していくためにもですね、自分の今、置かれた立場において本物性を問う。まあ、その意味で、人間であるとはどうあることなのか。夫であるっちゅうことはどうあることなのか。妻であるっちゅうことはどうあることなのか。父親であるっちゅうことはどうあることなのか。母親であるっちゅうことはどうあることなのか。課長であるっちゅうことはどうあることなのか。社員であるっちゅうことはどうあることなのか。経営者であるっちゅうことはどうあることなのか。とにかく自分の今、置かれてる立場、立場においてですね、その本物性を問う。これはやっぱり、今の自分の生き様を明確にしていく。今の自分の使命を明確にしていく。まあ、そういうことのために避けては通れない重要な課題であって、それを問わなければ偽物だ。それを問うて初めて本物だ。そういうふうなですね、区別ができてくるわけであります。そういうこの意識を持って自覚的に生きる。そのことによってですね、人間には本物性というものが、この現れ出てくる。で、そういう問いを持たなければ、そういう自覚が出てきませんのでですね、どうだってええじゃんってなってきてしまいますから、だから、その意味で、それは無自覚なですね、流されるような、偽物の生き方になってしまってるというふうに、まあ、言えるわけですよね。**

**そういうこの問いの原点としてですね、人間であるとはどうあることか。まあ、そういう問いをですね、まずわれわれは、持たなければならない。人間である、俺は人間だと思ってる人間にとって、人間であるとはどうあることかという問いは、自信を持って人間として時代を生きていこうと思ったならば、本当は誰も避けて通れないですね、重要な課題だというふうに言わなければなりません。それをこの現実的にですね、自分の立場に置き換えて言えば、なおさら避けて通れないこの重要な課題になってくる。あらゆる意味において、本物を目指すとするならばね、必然的にそういう問いは持たなければ、この本物としての生き方をしていけないということになってきます。父親とはどうあることなのか。母親であるということはどうあることなのか。妻であるということはどうあることなのか。夫であるということはどうあることなのか。部長であり、課長であり、係長でありということはどうあることなのか。社員であるということはどうあることなのか。幹部であるということはどうあることなのか。政治家であるということはどうあることなのか。経営者であるということはどうあることなのか。先生であるということはどうあることなのか。いちいち、その自分の今、置かれてる立場に置き換えて、それを問うならばですね、それこそまさにその立場において本物としてのあり方をですね、この意識しながら生きてる問いだとこう言うことができるわけで、そういう問いを持っていなければ、無自覚なね、無自覚な、流されるような、結局それはどうだってええじゃんという、そういう生き方になってしまうから、そこには魅力が出てこない。まあ、とにかくは、このなんかもう漠然として、まあ、流されるというね、まあ、そういう生き方になってしまってる。**

**自分の答えがないとですね、結果としては、他人の命令によって自分の肉体が支配されるという、まあ、そういうこの奴隷的な生き方になってしまう。答えを持つことによって、初めてこの自分で自分の肉体を支配する。まあ、そういう人間としてのですね、生き方ができる。自分の肉体が他人の思惑に、他人の意志に支配されれば奴隷だ。自分の肉体だけは、自分の意志と決断によって動かさなければならない。それが自覚的な本物の生き方だと。であるが故に、われわれは問いを持って、その問いに対する答えをまた探し求めて、そして、自分がその答えに基づいて生きるということをしなければならない。だけど、その答えに縛られた偽物だから、また本当にこれでいいんだろうか。また問わなければならない。そして、その問いながら、これでいい、これでいいということを自分で確認しながらですね、この自分を本物というあり方に、常に保って、そして生きていく、仕事をしていく。まあ、そこにこの人間らしいというね、まあ、そういう生き方が生まれてくるわけであります。**

**とにかく無自覚な生き方というのは、結果としては、この自分がない生き方であって、流されるというね、まあ、そういうこの状況になってしまう。俺はこうだという意識を持っておって、初めて対立が生まれてきて、そして、対立するものから学ぶことによって、自分が成長していく。どうだってええじゃんという生き方には成長がないわけですよね。成長できない。俺はこうだというものを持ってるからですね、だから成長できる。違った考えを吸収できる。だから、どうだってええじゃんというのは、これはまったく吸収もしない、学びもしない。また自分がないから流されてしまう。まあ、そういうふうなですね、このだらしない生き方になってしまうと。まあ、そういうことを考えるならば、原理的には、私は人間だと思ってる人間であるならば、人間であるとはどうあることなのか。どうあれば人間であると言えるのかという問いを持って、俺ならこう思う。まあ、そういう答えをですね、まず自分が持つ努力をしなければならない。そのことによってですね、自分自身が自信を持った確信のあるですね、生き方というものをすることができる。そういうものを持ちながらもね、なおかつ、それと違う答えがあったならば、そこからまた何かを学んで、自分の答えを成長させよう。また自分の答えのゆがみ、偏りを修正しよう。まあ、そういうふうなですね、意識を持てば、人間は成長することができるわけであります。成長するためには、答えと問い、両方がなかったならば成長しない。**

**この人間であるとはどうあることかという、この問いもですね、人間が存在する限り、人類が存在する限り、問い続けなければならない。まあ、そういう問いですので、これもやっぱり、人間存在における根源的な問いというふうにですね、言うことができるわけであります。どういう問いを持って本物は生きなければならないのかといったら、第１番目は、人間として本物とはなんなのかという問いである。第２番目は、人間であるとはどうあることかという問いである。だけど、もう１つですね、人間存在における根源的な問いというですね、重要なこの問いがあります。それは、人間はただ人間であるだけではない。人間は人間になる存在である。成人するというね、おぎゃあと生まれたときには、この動物学上の分類における人類だ。そして、人間は生まれてから後に、このいろんなことを学び、また人間として育てられることによって人間になるというですね、そういうこの道筋を歩むのが人間である。であるが故に、ただ人間は人間であるだけではない。人間は人間になる存在なんだ。そういうところから、じゃあ、どうなりゃ、人間になったと言えるのか。どうなれば、この人間になったと言えるのか。人間になるというのは、人間になるとはどうなることなのか。そういう問いが、また必然的に出てきてしまうわけですね。**

**経営者になるっちゅうことはどうなることなのか。部長になるっちゅうことはどうなることなのか。自分の地位が上がる度にそのことを考えてですね、この平社員と課長、どう違うのか。課長から部長に上がる、また部長であるっちゅうことはどうあることなのか。まあ、そのことを自分に問いながらですね、その役職において本物性を追求するということを、まあ、考えていかなければなりません。必然的にこの人間の成長のプロセスにはね、おぎゃあと生まれて、少年から青年になって、結婚して夫になって、そして、子どもができて父になるという、まあ、そういうこの成長のプロセスが命においては出てきます。で、その度にですね、その段階における本物性、どうすればいいのか、どう生きればよいのかっちゅうことをね、問うていかないと、その段階にふさわしい成長というものを遂げていくことはできません。そういう意味で、この人間になるとはどうなることなのか。どうなりゃ、人間になったと言えるのか。まあ、これもやっぱり、この人類にとってですね、人間存在における根源的な問いというふうにね、言わなければならない、まあ、重要な問題意識であります。**

**まあ、そういうふうに考えていったらですね、この人間が本物というあり方をするために、基本的に持っていなければならない問いというのは３つあるということがわかってきます。それは、この人間として本物とはなんなのかという問いと、人間であるとはどうあることなのかという問いと、人間になるとはどうなることなのかという問い。この３つがですね、人間存在における根源的な問いというふうに言うことができるわけであります。この３つの問いを持って生きてる限りですね、この人間は人間らしく生きるという、この人間の道を外れることはない。だけど、今、世界を振り返ればですね、残念ながら、誰一人としてですね、人間であるとはどうあることか、人間として本物とはなんなのか、人間であるとはどうあることなのか、人間になるとはどうなることなのかということを、ほとんどの人は問わないで、ただただ無自覚に生きてしまっておるのが現実の世界の人類の姿です。一国の大統領であっても、一国の総理大臣であってもですね、人間として本物とはなんなのかということは問わない。また人間であるとはどうあることかということも問わない。また人間になるとはどうなることかっちゅうことも問わない。だから、この人間性をなくしたようなですね、まあ、そういうこの言動を取ってしまうというのがですね、残念ながら、今の人類の姿です。**

**それが故に、全人類的規模において、この人間のあり方がぐらつき始めてですね、そして、倫理の崩壊というですね、あらゆる人間関係の絆がこの薄くなっていってね、そして、離婚の激増、幼児の虐待、違いを理由に殺し合う戦争、まあ、そういうこの倫理の崩壊、秩序の崩壊という、まあ、そういう状態にこの人類は立ち至っておるわけであります。これが、まあ、答えに縛られて、問いを忘れた人間の悲しい現実なんですね。で、これは日本人だけじゃなくて、全人類がね、今、そういう意味で問いを忘れてるんですよ。答えに縛られて、こうだという答えに縛られて、問いを忘れてしまっておる。問いの重要性というのを忘れてしまって、理性に支配されて、感性が衰弱してですね、問題を感じる感性が衰弱してしまって、問いの重要性というものを忘れてしまっておる。ここにこの答えに縛られて対立をつくり出してしまう。答えに縛られて自分が不幸になる。まあ、そういうこの人生を歩む、そういう人生を歩まざるを得ない結果がこう出てきてしまってるわけですね。**

**まあ、そこで、まずこの本物として、人間がこの今日を生きるためにはですね、この３つの問いをまずしっかりと、この自覚しながらですね、生きていかなければならないということを、まず押さえておいてもらいたいと。人間として本物とはなんなのか。人間であるということは、どうあることなのか。人間になるということは、どうなることなのか。これをですね、われわれ日本人は、人類の指導者として、まずは自分の生き方の原点に据えて、全世界の人類にこの問いを発するというですね、そういうこの生き方をこれからしていく必要があります。そのことによって、全人類に本当に人間として生きるとはどういうことなのかという、この答えに目覚めさせていく。問いを発することによって、それをみんなに考えさせてですね、そして、その答えに目覚めさせていくというね、まあ、そういうふうな、この指導力を発揮していく必要があります。そういうことをしていったならば、必然的にですね、この人間の命の根底から湧き上がってくる、この母なる宇宙の思いと願いと祈りということに、人類は目覚めていくはずであります。その願いと祈りとはなんなのか。それは、このできることならば、人間同士、みんな仲よく、信じ合って生きていきたいもんだ。これが人間の命の欲求です。なぜそういう欲求が湧いてくるのかといったら、その根底に母なる宇宙の思いがある。すなわち、自分が生んだ子どもたちがみんな仲よく信じ合って生きていってもらいたい。それをこの母なる宇宙は願っておる。**

**であるが故に、われわれはその母なる宇宙の思いに対して、母なる宇宙の願いと祈りを実現する生き方をする。まあ、ここにこの人間としてのですね、生き方の本物の原理があるんだ。じゃあ、そういうこのみんな仲よく信じ合って生きていくということをですね、今、この時代において実現しようと思ったら、いったいわれわれは、どういう生き方をしたらよいのか。どういうことを考えたらよいのかということをですね、答えとして求めていく必要があります。そういうふうに考えていったら、必然的に今を生きる人間として、みんな仲よく信じ合って生きていくということを実現していくためにはですね、どういうふうな答えを持って生きたらよいのか。今を生きる人間としての答えというものがね、そこから必然的に出てくるわけですね。で、これが、この第３番目のですね、人間の格とはなんなのか。今を生きる人間として、どういう内容を持てばですね、人間の格があるということになるのかという、この答えがそこから導き出されてくるっちゅうことになるわけですね。**

**まあ、そこでですね、犬猫とは違う人間の格とはなんなのか。まあ、そのことをですね、われわれは考えていかなければなりません。そういう今を生きる人間として、どういうこの内容を持てばよいのか。今を生きる人間として、どういう人間性を持てばですね、本物と言えるのか。まあ、そういうことを考えていこうと思ったならばですね、どういうふうな順序で物事を考えていくかといったらですね、そのためには、人間は神でもなく、また動物でもない。まあ、そういうこの比較という方法を用いないと、この人間の本質、人間における人間性とはなんなのか。人間における実質的な本質はなんなのか。まあ、そのことを答えとしてつかみ出すことはできません。この人間がね、持たなければならない、この人間性というのは、これは人間における実質的な本質というふうに、まあ、言うことができるものです。実質的な本質がイコール人間性である。今、われわれはどういう人間性を持ったならば、今を生きる人間として本物と言えるのか。まあ、これを問うていかなければならない。そのために、人間は神でもなく、また動物でもないというですね、こういうこの比較という方法を用いないと、その人間における実質的な本質というものを答えとして持つことはできません。この人間が持たなければならない人間性というのはなんなのかということをですね、人間そのものをどんだけ研究しても、その答えは出てこない。日本文化の本質はなんなのかっちゅうことを知ろうと思ったらね、日本文化と中国文化と西洋文化を比較しながらですね、日本文化の本質はここにあるんだというのが学問なんですよ。比較という方法を用いないと、物事の本質はつかめないんですね。そのために、人間というものがですね、持たなければならない実質的な本質というものをちゃんとこうつかみ出そうと思ったならば、人間は神でもなく、また動物でもないんだ。まあ、そういうふうなですね、ところから、神と人間と動物を対比しながら、人間の人間性とはなんなのかということを、このつかんでいかなければなりません。**

**ところが、これまではですね、われわれは人間でありながら、神や仏のような心を求めてきた。だから、この人間でありながら、神や仏のような心を求めてきたのでね、無欲がいいとかですね、足るを知れとかね、そういうふうなこの愚かなですね、判断をしてきてしまってですね、自分が不幸になってしまったんですよ。人間が人間になるためにはですね、この神や仏のような存在になろうとするんじゃなくって、人間らしい人間を求めていかなければならない。人間でありながら、他のものに憧れれば、自分はこの不幸になります。自分に対して否定的になりますからね、自分を許さない。だから、欲を持つことを許さないというのは、そういうこの考え方が出てくるわけです。もっともっとわれわれは、人間らしい人間とはなんなのか。人間としてのこの幸せとはなんなのかということをですね、求めていかなければなりません。だけど、これまで人類は、人間としての幸せを求めるんじゃなくってですね、強大なる力に憧れ、神仏に憧れ、理性に憧れて、人間としての幸せというものを求めるという、そういうこの意識をですね、見失ってしまってました。人間でありながら、他のものに憧れるという、まあ、そういう生き方をしてきてしまっておって、この人間らしい人間とはなんなのかということをですね、この見つめてみるという、まあ、そういうふうなことは、これまで忘れてました。**

**そういうところが、現在でもね、まだやっぱり、欲求、欲望、本能というものは何かしら醜いもんだ。欲は醜いもんだ。欲があるっちゅうことは駄目なことだ。まあ、そういうふうなですね、気持ちになってる人が多いし、またそういうことを言う方も随分といらっしゃいます。で、神や仏のように、この肉体がなければね、肉体がなければね、この肉体から湧いてくる欲求はありませんのでね、だから、神や仏のような心になろうと思ったら、欲は持ったらいけません。無欲にならないけません。それは神や仏のような心になろうと思ったらそうなんですよ。神や仏には欲はありません。だけど、人間には肉体がある、命がある。必然的にですね、食欲もある。性欲もある、睡眠欲もある、物欲もある。いろんな欲がこう湧いてくるのが人間の命です。そして、人間はその欲が実現されなければ幸せになりません。自分のしたいことができなければ幸せになりません。したいことができないのは不幸です。人間の本当の命の喜びは、欲求を実現することです。命から湧いてくる欲求を実現するから、人間は幸せになるんです。その命から湧いてくる欲求を否定して、そして、欲のないですね、神や仏のような心になろうと思ったら、ものすごく苦しみますよ。人間としては、つらい、苦しい、窮屈で堅苦しい。そういうふうなね、生き方をしなければなりません。それはこの自分の命を苦しめる。自分の命の素直なあり方をですね、否定する。まあ、そういう生き方になってしまいます。**

**人間が本当に人間として、まあ、素直にですね、肉体を持った存在として素直に生きていこうと思ったら、命から湧いてくる欲求を実現する生き方をする以外にありません。だけども、命から湧いてくる欲求をそのまま、この表現すれば、それは人間ではなくて、野獣である。犬猫である。だから、自分の命から湧いてくる欲求を実現しなければ、命の喜びはないし、幸せはないんだけど、だけど、その幸せを実現していこうと思ったら、理性を使わなければならない。理性を使ってですね、そして、その自分の欲求を最後まで実現して、命に喜びを与えていくためにはどうしたらいいのか。まあ、そのことを考えんといかん。本当、自分の欲求をそのままぶつけたんでは人と対立をする。他人に迷惑を掛けとったんでは、邪魔されてしまう。だから、自分のしたいことができなくなってしまう。だから、自分のしたいことを最後までやろうと思ったら、他人に迷惑が掛からん方法を考えなければならない。もっと言えば、他人に喜んでもらえる方法を考えないといかん。他人に役に立つ方法を考えないかん。他人に協力してもらえる方法を考えないかん。そのためにわれわれは、理性というものを使わなければならない。だけど、最後に求めるものは自分の欲求を実現することなんだ。だから、そのために理性を使わなかったら、欲求は最後まで実現できない。途中で邪魔されてしまう。そのために理性を磨いてですね、どうすればいったい、みんなに感謝してもらえるような方法で俺の欲求が実現できるんだろうか。まあ、そういうことを考えていく。**

**その結果として生まれてきたものが職業なんですよね。職業こそ、まさにこの欲求と理性とのこの協力作業によって出てきたものが職業という文化であります。仕事はしたいことをせんことには成功はしません。だけど、したいことをやっておったんでは野獣だ。したいことをどうすれば、人に喜んでもらえるような仕方でですね、実現することができるだろうか。それが職業というもののですね、このあり方であります。自分のしたいことをしながらも、人に喜んでもらえる。そして、金が入ってくる。自分も他人も喜ぶ。そういう構造でできておるのが職業であります。そこに人間的というね、まあ、そういう世界が生まれてくるわけですよね。だけど、残念ながら、これまではね、人間は人間でありながら、神や仏を理想としたり、理性を理想として、理性的になろうと思ったり、神や仏のような存在になろうと思ってですね、努力してきた。だから、この人間は自分というものをですね、何かしらこう、否定的に見たり、あるいは、自分を駄目だと思うようなね、まあ、そういうふうなこの考え方に陥ってしまってる人が多かった。だけど、これからわれわれは、人間らしい人間というものをですね、この生きる。神や仏を目標にするんじゃなくって、まさに母なる宇宙によってつくっていただいた人間を生きる。人間らしく生きる。そのことを考えていかなければならない。そういう段階に今、人類は到達したわけですよね。**

**そういうところからですね、まずはわれわれ、神ではない人間とはなんなのか。で、また犬猫のような扱いをされてしまったら、人間はむかつきますから、だから、動物とは違う人間とはなんなのか。いわゆる欲求、欲望をむき出しにすれば、それは動物だ、野獣だ。そういう動物とは違う人間とはなんなのか。また神とは違う人間とはなんなのか。そういう意味で、人間の格とはなんなのか。まあ、そのことをですね、われわれは問題にしていかなければなりません。そういう意味で、人間における実質的な本質、どういう人間性を持ったらですね、人間として本物と言えるのか。まあ、そのことを今という、この歴史的現実における人類の意識のレベルでね、それを考えたら、どういう答えが出てくるのかということをですね、これから考えていく必要があるわけですね。だけど、その答えは現在の答えであってね、その答えに縛られてしまったら、また成長は止まりますから、だから、人類はこれから、その答えを持っても、なおかつ問い続けて、そしてこのどんどん進化していってですね、そして、自分の命に潜在する、この母なる宇宙から与えられたすべての能力をこの顕現させていく。そういうふうにして、人類は人類史というものをつくっていってですね、人間として人間性を成長、発展させていくという、まあ、そういう道筋をこれから何万年もたどるわけですよね。**

**まあ、だから、先のことはわかりませんのでね、とにかくは、今、生きる人間として、今を生きる人間として、どういうこの人間性を持てばね、本物と言えるのか。どういう人間性を持てば自分は幸せになるのか。どういう人間性を持てば自分は仕事において成功するのか。そのことをですね、考えなければなりません。これからわれわれが生きる社会は、個性の社会、個性の時代だ。だから、封建時代のような人間性を持っとったらいかんわけですよね。昔の人間性は参考にならん。とにかくは、今を生きる人間として、何を内容として持てば人間の格があると言えるのか。本物と言えるのか。そのことをですね、問うていく必要があるわけであります。それがために、これまでの人間の意識とは違ってですね、神や仏になろうと思ったらいかん。また動物みたいになってしまってもいかん。そういう意味で人間らしい人間とはなんなのか。そのことをちゃんと問題にしていくということが、まあ、大事なんですよね。**

**で、そういうふうな考え方をしていったらですね、どういうふうなこの人間性、どういうこの格というものがですね、人間の格として出てくるのかということなんですね。これはもう結論的にはね、３つの、この今を生きる人間として持たなければならない人間の格というものが３つ出てきます。それはどういうふうなかたちでですね、その３つというのは導き出されてくるのかといったらですね、まずその神とか仏とかというね、こういう、まあ、存在というのは、人間ではない、人間を超えた精神的実体というふうに言われてですね、そして、超越的存在と言われて、いわゆる、まあ、神とか仏っちゅうのは、絶対的な存在というふうに、こう言われておるものであります。その神や仏というものを絶対なるものというふうにですね、意識するから、だから、人間は神ではないと、自分のことを思いますので、その意味で、人間は不完全ということがですね、この言えるわけであります。人間は不完全だ。完全ではない。自分は神ではないと思うからですね、われわれは自分のことを不完全というふうに、こう言うことができるわけなんですよね。**

**まあ、そういうことを考えていったらですね、まずその今を生きる人間として、神ではない人間らしい生き方をしようと思ったら、まずは不完全性の自覚というものをですね、ちゃんとちゃんとの味の素で持たんないかんっちゅうことがわかってくるわけですよね。不完全性の自覚。自分は不完全だというね、そういう自覚をまず持つことがですね、本物の印だと。要は不完全でいいんだっちゅうことなんですよ。不完全が悪いというんじゃなくってね、不完全、それが人間なんだ。だから、不完全でないといかんっちゅうことですよ。これまでも人間は不完全だと言ってきましたけどね、だから、不完全だと思うからね、だから、完全じゃないといかんと思って、短所をなくしましょうというようなことをやってきたんですよ。だけど、これからは不完全でいいんだ。不完全にならんないかんのだ。不完全は恥ずかしくない。不完全、それが人間なんだ。神ではないんだからね、神は完全なんだから、だから、われわれは不完全なんだから、不完全でいいんだ。不完全をどう生きるかっちゅうことなんですよ。完全になろうと思わないで、不完全をどう生きるかということが人間らしく生きるっちゅうことなんだっちゅうことをね、まず押さえなければならない。**

**まず今を生きる人間として要求されるのは、不完全でいいんだ。不完全性の自覚なんですよ。俺は不完全っちゅうとね、なんかいかんなと思ってしまうのは、これまでのね、この完全性を求める意識からしたらね、不完全っちゅうことはなんか完全じゃないんだから、これはいかんなというふうに、皆こう、そういう意識になってしまうんですけど、それはもう過去の人間だからね、過去の意識を引きずってるから、そう思うだけの話なんですよ。人間は不完全でないといかんのだ。不完全を生きなければならない。完全になる必要はないんだ。完全になったら、人間じゃなくなってしまうからね、完全じゃないほうがいい。そういう意識になかなかなれない。皆ね、まだまだ。不完全でいいんだ。不完全を生きることが大事なんだ。それが人間なんだというね、まあ、そういう意識になかなかなれない。**

**だけども、とにかくは、まず、なんでね、なんで人間に不完全性の自覚というのが大事なのか。それは、俺は不完全だという意識を持つことができるのは人間だけなんですよ。神にも動物にも、俺は不完全、自分は不完全だという意識を持てないんですね。神が自覚を持つならば、完全性の自覚でなければならない。神は、俺は完全だという意識を持ってもらってないと困るわけですよね。で、神様がうっかりしちゃったりなんかしてですね、人間が持てるような自覚をですね、神が持てないはずがあろうかなんてなことを思っちゃったりなんかしちゃったりなんかして、で、神様がですね、俺は不完全だって、そういうこの不完全性の自覚を持ってしまったら、神でなしになっちゃいますから。困っちゃうなっちゅうことになりますから、神はそういう自覚は持てないし、持つはずがない。神が自覚を持つならば、自覚としては、俺は完全だという自覚でなければならないんですね。で、動物はどうか。動物は人間と同じように不完全な存在なんですけど、動物は、俺は不完全だということを知らない。ということは、動物は人間のように完全なるものを意識することができるという理性を持ってませんからね、だから、理性を持ってないから、動物は自分は完全ではないっちゅうような意識を持てないんですね。**

**だけど、人間は、存在論的には不完全でありながらも、意識において、理性という完全なるものを思い描く力を持ってると。だから、人間だけがですね、自分は完全じゃないというね、まあ、そういうこの意識を持つことができる。まあ、そういうところからですね、この人間にしか持てないこの自覚を持たずして、どうして人間として本物と言えるのかというね、まあ、そういう根拠が出てくるわけであります。人間にしか持てない自覚を持たんで、どうして本物かっちゅうことなんですよ。神にも動物にも持てない、不完全性の自覚はね。だから、まずはその不完全性の自覚を持たなかったら、人間ではないというふうにね、言うことができるわけです。俺は不完全でええんだとこう、ちゃんとそのことをわからないかんと。だけど、この不完全性の自覚というものは、自覚でとどまっておったのでは、自覚は単なる意識で、単なる知識だ。だけど、人格とか人間性というものは知識ではない。命に染み込んで、命と一体性にならなければ、人間性とは言えないと。**

**じゃあ、この不完全性の自覚というものがですね、命に染み込めばどうなるかっちゅうとですね、命に染み込んで、本当に不完全性の自覚が自分のものになったらどうなるかといったら、謙虚さがにじみ出てくる。謙虚さがにじみ出てきて、初めて不完全性の自覚が身に付いたということになって、本物だということになってくるわけですね。知識を持ってるだけでは、まだ偽物だ。本物というのは、命からにじみ出てくる。そうなって初めて身に付いた、本当にそうなった、本物になったと言えるわけですね。不完全性の自覚がその命に染み込んで、不完全性の自覚が深められていってですね、そして、謙虚さとなって、それがにじみ出てきたとき、本当に人間になった。すなわち、人間性を持ったというふうにこう言うことができる。謙虚さがにじみ出てきて初めて人間になったと言える。なぜ謙虚さが人間になった印なのか。それは、人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは短所だ。長所じゃない。不完全というこの短所が、人間らしい心をつくってくれる。人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは短所だ。短所がなかったら、人間ではない。長所ばっかになってしまったら、神だ。長所ばっかになってしまったら、人でなしになってしまう。短所がなければ、人間らしい人間ではない。短所はなければならない。短所がなかったら、心はできない。人間らしい、美しい心はできない。そのことをですね、まずわれわれはちゃんと押さえる必要があります。**

**人間らしい人間というのは、不完全性の自覚が深められていって、謙虚さがにじみ出てきて、初めて人間らしい心を持った、人間になったとこう言うことができるわけなんですね。だけども、じゃあ、短所はあっていいんか。短所はもう何も努力せんでもええんかということになってくるとですね、そうなると、ちょっとあんまりその短所はあっていいんだということで開き直ってしまうと、またこれも短所についての無自覚さになってきてですね、で、その人間としては愚かということになってきますので、短所はあっていいんですけども、俺の短所はここなんだと知っていないと人間ではない。俺の短所はここなんだと知っておることが人間としての印なんだ。短所はあるのに知らんかったら、短所があるという生き方はできませんからね。だから、短所をなくす努力はしたらいかんのだけど、短所があることは知ってないと、短所がある人間としての自覚的なですね、この生き方はできませんから、短所はなくならないし、短所がなくなったら人間じゃないから、短所をなくす努力はしたらいかんのですけども、だけども、短所があることは知っていなかったら、人間ではない。短所があるのが人間だからね、その短所をちゃんとわかってなかったら、人間ではない。**

**自分の短所はここなんだと知っておって、初めて本物だ。短所があるのに知らんかったら偽物だ。自分の短所はここですと言えて、初めてですね、本物だ。しかも、またその短所が出てくれば、嫌われてしまう。短所が出てくれば、人に嫌われるし、また短所が出てくれば、人に迷惑を掛けますから、だから、この短所はなくならないんだけど、短所はあんまり出てこないように注意をするということは、これは相手に対する思いやりであり、心遣いであり、愛だ。そういうふうにすることが、短所があることを生かして生きるというね、人間らしい生き方になるわけです。人間らしく生きるっちゅうことは、短所はなくならない。短所はあっていいんだ。だから、俺の短所はなんなのか、ちゃんと知ってないといかん。だけど、短所が出てくれば、嫌われてしまってですね、この嫌な思いをさせるから、だから、短所はあんまり出てこないように注意をするのが人間らしい心遣いだ。それが愛だ。思いやりだ。そういうところにですね、人間らしく生きるというね、そういうこの生き方が生まれてきます。それがいわゆる短所を生かすということなんですね。短所を生かす。**

**そして、なおかつ、短所を本当に生かそうと思ったならば、本当に本物の人間として現実を生きていこうと思ったなら、堂々と自分の短所をさらけ出して、俺の駄目なところはここなんだと言ってですね、だから、みんな助けてくれよと言ってですね、人に助けてもらう力をつくっていかないかん。そして、助けてもらって、助けてもらった人に、助けてくれた人にですね、ありがとう、君はすごい力を持ってるね。すごいね、素晴らしいねと言って相手を褒める。これが人間だ。それが人間性だ。助けてもらって、相手に感謝して、相手の存在を輝かせて、相手を評価して尊敬する。それが人間らしい心だ。長所で相手を助けてあげるだけでは相手を惨めにする。助けてあげるだけでは人間ではない。半分は助けてもらわないと、人間ではない。助けてもらって、感謝することが人間だ。助けてもらって、相手を尊敬することが人間だ。それが活人力なんですね。短所があるから、われわれは人を輝かせる活人力を持つことができる。人を生かして初めて人間だ。それが短所を生かして生きるというね、人間的な生き方の基本であります。**

**とにかく短所はなければならない。短所をなくす努力はだけど、絶対したらいかん。それは苦しいから、自分が駄目になるから。努力するんだったら、長所を伸ばす努力をせんないかん。短所をなくす努力は絶対したらいかん。なくならないものをなくす努力をするほど、ばかなことはないんですから。苦しむだけですよ。なくならないものをなくそうとするんですから、それはもう理屈に合わん話や。伸びる長所をとことん伸ばす。それが人間的っちゅうことですよね。どんな人間でも長所はある。長所のない人間はないんですから。自分の短所はここだっちゅうことも知っとらないかんけども、自分の長所もここだっちゅうことを知っとらないかん。知る、自覚してることが人間っちゅうことですからね。自覚していないっちゅうことは、どうだってええじゃんっちゅうことになりますからね。ちゃんと知っとかんと、人間じゃないですから。だから、短所もここだ、長所もここだということをちゃんと知っておって、長所も短所も生かし切って生きる。そこに人間らしく生きるというね、まあ、そういう生き方ができてくる。**

**短所っちゅうとね、なんかいかんなと思うんですよね。これは表現の仕方による。いわゆる、まあ、金庫破りっちゅったら、なんかいかんように思いますけどね、だけど、金庫破りというのはなんなのかといったら、鍵を使わないで金庫を開ける技術なんですよ。すごいことなの。で、ものは言いようでですね、よくも悪くもなるんだ。だから、その短所というと、なんとなくいかんなというふうにね、そういうふうにこう、ふっとこう意識してしまうんですよね。すりっちゅうから、具合が悪いんだ。人知れずして、ある物体をA地点からB地点へと移行させる技術といったら、これすごいですね。そう簡単にはできない。すりっちゅうと、なんか悪いことになってしまう。短所っちゅうから、なんかおかしいんですよね。だから、言い方を変えないかん。だから、時代が変わればですね、物事の表現の仕方、言葉もまた新しくつくり直さないかんっちゅうことになってきますよね。極論を言えばね。昔と同じ言葉を遣っておったんじゃ、意識は変わらんと。だから、人間観を変えて、人間の意識を成長させようと思うと、新しい表現方法っちゅうかですね、言葉をつくらんないかん。まあ、そういうこともこれからのね、時代においては課題となってきます。**

**とにかくは、この人間も宇宙によってつくり出された一個の存在なんだ。宇宙は宇宙の摂理に基づいて、あらゆるものをつくるんですよね。じゃあ、摂理とはいったいなんなのかといったらですね、宇宙の摂理というのは、このマイナスに評価するエネルギーと、プラスに評価するエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら、宇宙の秩序をつくっているという、その状態を宇宙の摂理と言ってるわけですよね。で、宇宙の摂理というのは、高等学校の教科書のレベルでいったら、エネルギーバランスなんだ。で、バランスを取ろうと思ったらですね、相対立する両極の原理が必要なんですよね。だから、バランスを取るために宇宙はマイナスとプラスという、そういうこの相対立するように見える、そういう原理を持っておって、そのプラスとマイナスが協力し合いながら働いて、宇宙の秩序ができてるわけですよね。だから、宇宙においては、マイナスもプラスも両方とも必要なんですよ。いい悪いの話じゃないんだ。プラスのエネルギーとマイナスのエネルギーが必要。だけど、それを人間はプラス、マイナスと言ってしまうから、マイナスっちゅうのはなんか、やっぱりマイナスやわなという意識になってしまって、なんか悪いかなって、そういう感じになるんですけど。その相対立する原理がなかったら、バランスは取れませんからね。それをこの感性論哲学では対存在、一対という、対というね、そういう理解の仕方をするわけです。一対という。対存在。**

**対という、そういう存在があって初めて宇宙はバランスが取れてる。そういう力で宇宙は万物をつくりますからね、だから、この宇宙の中に存在するものは常に一対という、対という相方をみんな持ってるわけですよ。男には女がおるし、表には裏があるし、光には影があるしですね、陰には陽があるしですね、善には悪、美には醜、真には偽、清には濁ね、上には下、右には左、前には後ろと、全部一対になってるわけですよ。動物、植物ね。でも、対となって初めて両方が存在できるというね、そういうこの植物がなくなったら、動物もなくなってしまうのでね。動物と植物は同じ比率がなかったら生存できない、両方ともね。そういうバランスで成り立ってるわけですよ。で、人間もやっぱり、その宇宙によってつくり出された存在だからね、だから、人間性というものも、そのプラス面とマイナス面、すなわち長所、短所が半分ずつあるという構造でバランスを取ってるわけなんですよ。で、長所、短所が半分ずつあるからね、長所で助けてあげて、短所で助けてもらうというね、まあ、そういうかたちで社会が成り立つようになってるんですよね。**

**それをこの宇宙の原理からいったら、相互補完的関係っちゅうんですよね。相互補完的関係。あらゆるものはみんな相互に補完的、相手の足らんところを補い合うという関係性で協力し合ってるわけですよね。だから、人の短所を発見したら、責めたらいかん。ぱっと助けてあげんないかんと。人の短所を助けるために俺は長所を持ってるんだというふうに思わんといかんので、一人の人間に完全性を要求してですね、そこのところは気に入らんから直せというようなことを言うとったら、これはその人間扱いしてないっちゅうことですよね。相手の短所を発見したら、ぱっと助けてあげる。自分の短所はさらけ出して助けてもらう。それが人間的っちゅうことなんですよね。そのために、助けてあげなきゃならんからね、この人の役に立つことができるように、長所を伸ばして磨くんですよね。そして、人間なんだから、短所がなければならない。短所があっていいので、短所をさらけ出すんですよ。恥ずかしがらないで。恥ずかしがらない短所をさらけ出して、俺の駄目なところはここなんやと言えることが人間なんですよ。**

**だけど、これまではその短所を言うことを恥ずかしがっててね、短所を言うたら、なんかばかにされたり、短所を言うたら、なんかそこのところが問題だということになって責められてしまう。あんまり短所はもう出したらいかんて、そういうふうな意識でね、やってきましたから、つらかったんです。短所を隠さないかんから。短所はあって当然なんです。しかも、半分もあっていいんですよ、もう。いっぱいあっていいんですよ。半分は短所なの。短所をさらけ出して、で、助けてくださいと言って、堂々と助けてくださいと言って、助けてもらったら、ありがとうっちゅうて感謝をして、相手を尊敬して、君はすごいね、すごい力を持ってるねと、相手を褒めたたえる。それが活人力なの。助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことも立派な人間の行いなんだ。助けてもらう力が人間力なんだ。もっともっと助けてもらえるような人間に成長せんないかん。おまえなんか助けてやるかというようなことを言われたらいかん。本当、助けてあげたくなっちゃうようなかわいい人にならないかん。ついつい助けてあげたくなっちゃうっちゅうね。そういうかわいい人にならないかん。そのためには、短所をさらけ出さないかん。で、助けてもらって、ありがとう、ありがとうと言ってですね、相手に感謝しとったら、人間関係はうまくいくわけですよ。だけど、助けてもらうばっかじゃね、これはもう人を利用するだけになりますから、助けてもらったら、何かしらその人を助けてあげるだけの力を自分が持ってないとバランスが取れない。助けてもらうだけじゃ、ばかにされてしまう。何かしら、この人に関しては、どんな人でも助けてあげることができるっちゅうような、そういう力をね、つくる。そのためにわれわれは、長所を伸ばすという努力をせんないかんと。**

**で、しかも、仕事で使う能力というのは、これはやっぱり、金を取る能力なんだから、だから、長所というものは、やっぱり相手からね、さすがにプロですねと。プロというのは、金を取るからプロなんですからね。だから、さすがにプロですねと言ってもらえる、そういう力をつくらないと、プロとしては恥ずかしい。いわゆる相手に対してですね、どんなことをしてあってもですね、相手からさすがと言ってもらえないような力でね、金を取ろうなんちゅうのはおこがましい話やと。値切られるようじゃ、プロじゃない。こんだけのことをしてもらったんだから、これはこのぐらいの金は出さないかんよなと。これじゃ、ちょっと少ないからと思って、ちょっとチップでもくれるぐらいのですね、この仕事の仕方をして初めてプロだ。客に金の出し惜しみをさせるようじゃ、プロじゃない。惜しみなく金を出したくなるようなね、そういう仕事の仕方をして初めてプロだ。だから、成果でですね、いくらですと言って、それは当然やわなと思わせないとね、プロではないと。客にさすがと言わせる力を持たなければ、堂々と金は取れん。**

**で、そういうこの人の役に立つ仕事をするためには長所を磨かんないかんね。長所を磨かないと人の役に立てません。短所は、短所を磨いちゃったりなんかしたらとんでもないですからね。短所は、これはなくならないんで、駄目なところを磨いちゃってどうするのということになりますからね。その長所のところを磨いてですね、人の役に立つようなね、そういう優れた能力をつくって、人にさすがと言わせないといかん。だけど、短所はさらけ出して、助けてもらわないかんと。もっともっと、人間は楽にね、人生を生きる力をつくっていかんと、なんでもかんでも自分でやろうと思ったら、これはつらい、苦しい。できるだけ人に助けてもらって、感謝をして生きるというね、その力をつくっていく必要があります。**

**もっともっと部下に仕事を任してね、で、部下に仕事をしてもらってですね、で、君はすごいねと言って部下を育てるのが、短所を活用した教育法なんですよね。教えてやるばっかりじゃ、相手を惨めにするし、教えてあげるだけじゃ、命令に従ったね、命令に従って動く部下はできるけれども、自分で考えて動く部下はできない。自分の短所をさらけ出して助けてくれっちゅうからですね、相手は考えて、そして、この現実の問題に対してこうしたらどうだろう、ああしたらどうだろうと思って、自分で考えて助けてくれる。助けてもらう力をつくっていかないと、相手が創意工夫して、そして、自分でやってあげようという、自分でやろうという気持ちでね、やってくれない。助けてあげるだけじゃ、教えるだけじゃ、駄目なんだ。助けてもらわないと、人は輝かないし、能力は伸びない。本当には力、本当の実力は成長しない。**

**まあ、とにかくそういうこの人間は不完全なので、不完全でなくなったら人間じゃないので、不完全でいいんだっちゅうことをね、まずちゃんと押さえないと、これからの時代は生きていけません。個性の時代っちゅうのは、お互いにこの相互補完的な関係で、個性があるから、お互いに助け合ってですね、相手の足らんところは助けてあげる。自分の足らんところは助けてもらう。そういうかたちで個性の時代というのは関わっていくのがですね、個性の時代だし、また社会構造としてもですね、これからは縦型社会という、上意下達のですね、縦型の構造から、横型の社会であるフラットな構造へと変わっていくんですよね。で、統合とか、パートナーシップとかという、そういうかたちで人間同士が関わっていかなければならない。だから、いろんな意味で相互補完的な関係というかたちでね、関わっていかないと、フラットな社会、横型社会というものを生きていく実力をつくってはいけません。そのためにも、長所を磨いて人を助けてあげて、短所をさらけ出して助けてもらって、そして、感謝をして生きるというね、まあ、そういうこの生き方の基本というものをですね、ちゃんと自分が自覚的につくっていかないと、そういう人間らしい美しい生き方はできません。**

**美しく生きようと思ったら、短所をさらけ出さないかん。美しいっちゅうのはどういうことなのかといったら、感謝する、恩を感じる、尊敬する、相手を褒める。そういうのが美しいっちゅうんですよ。助けてあげるだけじゃ、相手を惨めにする。助けてあげるだけで短所を出さなければ、傲慢になるしかない。慢心ができてくる。これは醜い。傲慢さほど人間にとって醜いものはない。傲慢さほど恐ろしいものはない。助けてもらって、美しいんだ。なぜかといったら、助けてもらわんと感謝できませんからね。助けてもらってないのに、感謝、感謝っちゅうから、観念的な感謝になるんですよ。なんでおまえに感謝せないかんねやとなってきますからね、助けてもらって初めて感謝できるので、素直に。助けてもらわないと、感謝するという実力や人間性はできてきません。助けてもらって感謝して、恩を感じて、ありがとうっちゅうって、相手を尊敬して褒めたたえる。それが美しいっちゅうことですよ、それはね。**

**まあ、そういうこの、まず人間はですね、この人間は不完全なんだということをちゃんと自分でわかってですね、そして、不完全を生きるというね、まあ、そういうこの気持ちをつくっていかなければならない。だけども、じゃあ、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さを持っておったら人間かといったら、それだけではまだ人間じゃない。謙虚さだけでは人間じゃない。謙虚さは根底に大事なんだけど、一番土台に大事なんだけど、それだけでは人間ではない。謙虚、謙虚、謙虚、謙虚じゃ、鳥が鳴いてるみたいですからね。謙虚さだけじゃ人間じゃないと。あと２つ、重要な課題がある。まあ、それは次回に話すことなんですけど、このあと２つはですね、人間としてもっともっと成長したいというね、人間としての成長意欲がなかったなら、また人間ではない。人間としてもっともっと成長したいという、そういう気持ちを持ってないといかん。それから、３番目の、最後の３番目のですね、本物の条件は、これは社会性という観点から出てくるんですけど、社会性というのは、これはなんなのかといったらですね、社会というのは、この他人に評価されて自分の価値が出てくるという構造になってるんですよ。すなわち、社会というのは、自分の価値は他人が決めるんですよ。どんなすごい力を持っておってもね、他人に評価されなかったら、ゼロの人間なんですよ。**

**社会の現実は他人に評価されてなんぼの世界や。だから、われわれ社会においては、人の役に立つことを喜びとする感性。人の役に立つことをうれしいと思う、まあ、そういう感性、愛を持ってないと、社会は生きられない。人の役に立とうと思う気持ちがあって、初めて商売は成り立つのでね、それがなかったら職業は成り立ちませんからね。で、人に役に立って金が入ってくるんで、人の役に立ってなんぼの世界やと。人に評価されてなんぼの世界や。まあ、そういう社会の現実からしてですね、本物の人間になろうと思ったら、人の役に立つことを喜びとする感性、愛を磨いていかないと、愛の実力をつくっていかないと、本物の人間にはならんと。まあ、その意味でですね、この現実を生きる人間として磨いていかなければならないですね、人間性というのは、謙虚さと、成長意欲と、愛なんですね。この３つが、今日を生きる人間として、この持っている必要がある、人間の格の具体的な内容であります。その３つのことについて、次回ですね、もっと詳しくお話をさせてもらいたいと思っております。今年はまあ、これで終わりなんですけどね、来年の始まりが、２月からまた始まりますので、その２月のときに、人間の格とはなんなのかというね、その話をもう少し詳しくね、具体的に展開して、どういう格を持てば本物の人間と言えるのかという、そういう話を次はさせてもらいたいと思っております。どうもありがとうございました。**